

井辺遺跡

—都市計画道路湊神前線道路改良工事に伴う発掘調査報告書—

2013年3月

公益財団法人 和歌山県文化財センター

序 文

和歌山市は、和歌山県の北西隅に位置し、紀ノ川によって肥沃で広大な和歌山平野が形成されています。この平野部を中心として様々な人々が生活を営み、数多くの遺跡が残されました。

本書に収めた井辺遺跡は、和歌山市内の平野部に所在する遺跡の中でも、広範囲に展開する遺跡です。過去の調査により、弥生時代後期から古墳時代前期、古墳時代中期から中世の集落遺跡が見つかっています。また、東側の丘陵には古墳群が所在しており、墓域を含めた集落の構造が注目されています。

今回の調査では、弥生時代終末期から古墳時代前期を中心とする、竪穴建物3基、掘立柱建物1基、溝や土坑など多数の遺構が検出されました。集落にかかわる遺構は、井辺遺跡全体の集落の様相を復元する上で重要な成果と言えます。ここにその成果を報告します。

これらの調査成果が郷土の歴史を知るための一資料となり、埋蔵文化財への認識を深め関心をもっていただく一助となることを願っております。

最後になりましたが、本事業の推進にあたり、ご指導、ご支援を賜りました関係者各位ならびに関係機関の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成25年3月25日

公益財団法人 和歌山県文化財センター

理事長 森 郁夫

例　　言

1. 本書は、都市計画道路湊神前線道路改良工事に伴う発掘調査報告書である。
2. 本事業のうち発掘調査は、海草振興局の委託事業として、和歌山県教育委員会の指導のもと平成23年3月25日から平成23年7月15日まで、また出土遺物整理業務を平成25年1月28日から平成25年3月15日までの期間で公益財団法人和歌山県文化財センターが行った。
3. 発掘調査及び報告書刊行に係る体制は下記の通りである。

発掘調査及び出土遺物整理業務

事務局長 田中 洋次（平成23年度） 渋谷 高秀（平成24年度）

事務局次長 山本 高照（平成23年度）

埋蔵文化財課長 村田 弘

発掘調査担当 丹野 拓（5-1、6-1区）

土井 孝之（5-2区、6-2区、7区）

出土遺物整理担当 森原 聖

4. 本事業の遂行に当たり海草振興局並びに地元自治会、地域の方々から多大な援助を受けた。ここに記して感謝の意を表します。
5. 出土遺物は和歌山県教育委員会が保管し、発掘調査・出土遺物整理で作成した実測図・写真・デジタルデータ・台帳などの記録資料は、公益財団法人和歌山県文化財センターが保管している。

凡　　例

1. 遺構等の土層注記に記載した土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修『新版標準土色帖』（2005年版）に基づいた。
2. 調査の際の平面座標基準は、世界測地系平面直角座標VI系に準拠し、標高値はT. P.（東京湾平均海面）を用いた。
3. 本書に掲載した遺構図版縮尺は、全体図を1/200、個別遺構平面図・断面図を1/30、1/60、1/80、基本土層柱状図を1/20として掲載した。
4. 本書に掲載した遺物図版縮尺は、土器・石製品・陶磁器を1/2・1/4、金属製品を1/1として掲載した。
5. 遺構番号は基本的に発掘調査時の登録番号を踏襲した。遺構の検出順に1から通し番号を付しており、「遺構の種類 - 遺構番号」と表記した。ただし、遺構番号の煩雑な場合は、便宜的に「柱列1」のように遺構名で表記した。
6. 遺物番号は、出土遺物観察表・遺物写真図版の遺物番号と一致する。
7. 本書掲載地図は、和歌山県教育委員会『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』（平成23年度版）と、都市計画基図をそれぞれ加筆し使用した。

本文目次

序文

例言・凡例

第1章 調査の経緯と経過	1	(2) 柱穴	13
第2章 位置と環境	2	(3) 溝	14
第1節 地理的環境	2	(4) 土坑	15
第2節 歴史的環境	2	(5) ピット	18
第3節 既往の調査	4	(6) 落ち込み205	19
第3章 調査の方法	5	第2節 6区の調査	20
第4章 基本層序	5	第3節 7区の調査	21
第5章 調査の成果	6	第4節 噴砂の砂脈	21
第1節 5区の調査	6	第5節 出土遺物	23
(1) 建物跡	6	第6章 まとめ	24

挿図目次

第1図 調査区の位置	1	第12図 溝003	14
第2図 井辺遺跡周辺の遺跡分布図	2	第13図 溝004・136	15
第3図 既往の調査による井辺遺跡の様相	4	第14図 連続土坑群	16
第4図 グリッド設定図	5	第15図 土坑	17
第5図 基本層序	6	第16図 ピット	18
第6図 5区 遺構配置図	7・8	第17図 落ち込み205	19
第7図 5区 土層断面図	9	第18図 6区 遺構配置図及び土層断面図	20
第8図 竪穴建物1	10	第19図 7区 遺構配置図及び土層断面図	22
第9図 竪穴建物2・3	11	第20図 出土遺物実測図(1)	25
第10図 掘立柱建物	12	第21図 出土遺物実測図(2)	26
第11図 柱列1・2・3・柱穴297	13		

表目次

出土遺物観察表	27・28
---------	-------

図版目次

写真図版1 井辺遺跡全景
写真図版2 5区 建穴建物
写真図版3 5区 建物遺構・溝
写真図版4 5区 柱穴・土坑

写真図版5 5区 土坑・落ち込み、 6区、7区、噴砂痕
写真図版6 出土遺物(1)
写真図版7 出土遺物(2)

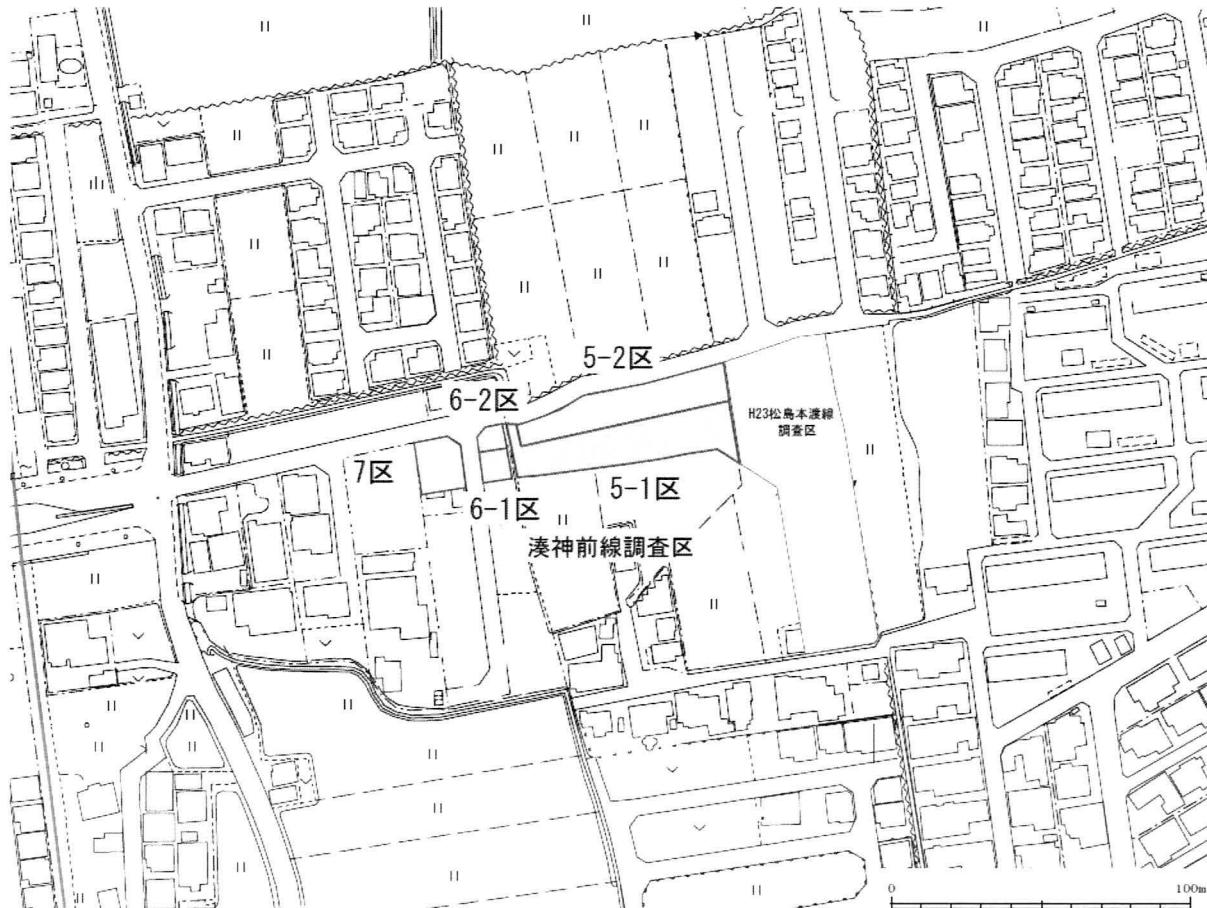
第1章 調査の経緯と経過

今回の調査は、和歌山県が都市計画道路松島本渡線及び湊神前線道路改良工事・県道和歌山橋本線を計画し、その予定地の一部が『和歌山県埋蔵文化財包蔵地所在地図』に記載された井辺遺跡及び神前遺跡に該当したため、文化財保護法第94条の規定に基づき、平成19年9月18日付で和歌山県教育委員会に埋蔵文化財発掘について通知が提出された。その後、工事予定地のうち調査可能な範囲について、和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課（以下、県文化遺産課）が、第1次確認調査を平成21年2月12日から3月3日まで、第2次確認調査を平成21年9月29日から10月20日まで、第3次確認調査を平成22年5月11日から21日まで実施した。

確認調査の結果、埋蔵文化財の展開が確認された範囲である調査区5・6の面積1,711m²を対象に、調査を実施することになった。

その後、県文化遺産課により第4次確認調査を平成22年12月14日から12月17日まで、第5次確認調査を平成23年3月14日から23日まで実施された。その結果、調査区7が調査対象地として追加された。

これらの追加調査を含め井辺遺跡第3次調査として、平成23年2月22日から平成23年8月31日にかけて、1,812m²について調査を実施した。



第1図 調査区の位置

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

和歌山市は、和歌山県の北西隅に位置し、北は和泉山脈を境に大阪府泉南郡岬町及び阪南市に、東は和歌山県岩出市及び紀の川市に、南は海南市に接し、西は紀伊水道に面している。奈良県の大台ヶ原に源を発する紀ノ川が本市の中央を流れ紀伊水道に注いでおり、その過程で運ばれた土砂により和歌山平野が形成されている。

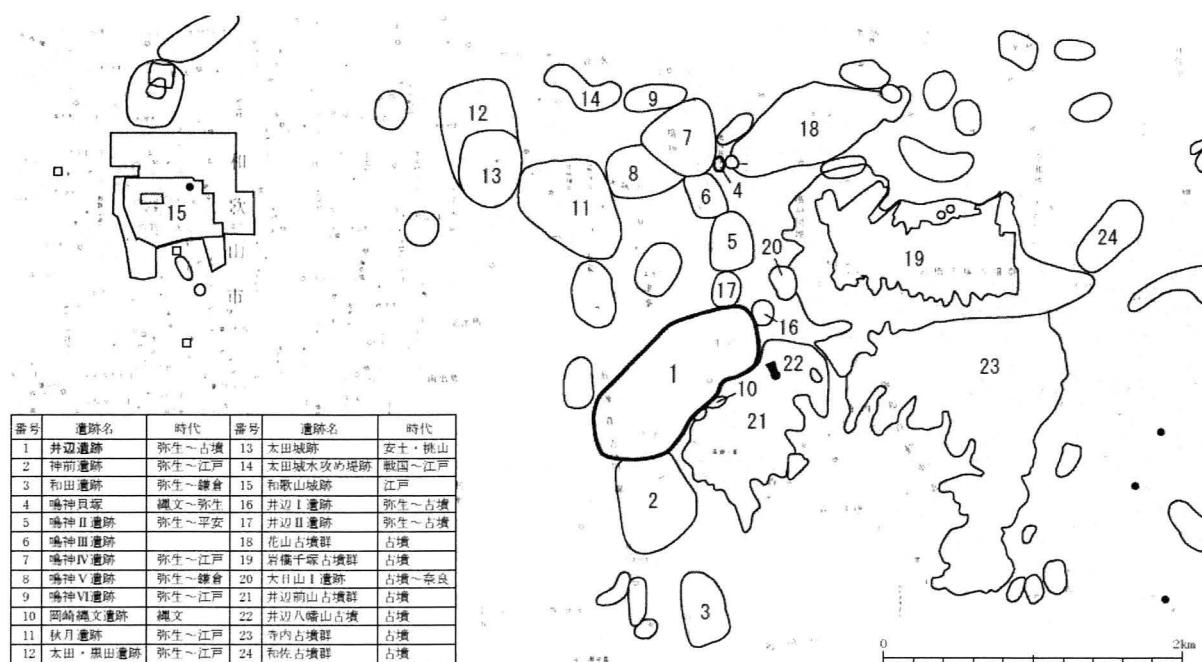
弥生時代から古墳時代の紀ノ川の河口は、東方から西流し、海岸線に形成された大規模な砂丘に沿うように、現在の紀ノ川の北岸、和歌山市楠見・平井津辺りで南東方へ、さらに和歌山城・吹上と和歌山市友田町・吉田津の間を南下し、名草山西麓の和歌の浦に注ぐ。現在の和歌川が紀ノ川（木御川）として流路変遷の痕跡を留める。この紀ノ川の流れの方向が、今回の井辺遺跡の調査で主体を占める弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての地理的・地形的な景観である。

和歌山市井辺及び神前に所在する井辺遺跡は、福飯ヶ峰の北西麓平野部で南側の神前遺跡と接し、東西約1.1km・南北約1kmをその範囲とされ、往時の紀ノ川南東岸の県内でも最も肥沃で広大な面積を抱える和歌山平野の東部に位置する。岩橋山塊の西端に位置する半独立丘陵である福飯ヶ峰の北西側に開けた標高3m前後の丘陵裾部から沖積平野部に立地する。また井辺遺跡の南側に接して位置する神前遺跡は、沖積平野部から遺跡南側を西流する和田川により形成された自然堤防上にかけて立地する。

第2節 歴史的環境

井辺遺跡の立地する岩橋丘陵の西麓は、東部の丘陵上に位置する大規模な古墳群とその丘陵裾から沖積平野部に展開する集落や古墳など紀ノ川南岸でも屈指の遺跡密集地帯である。

縄文時代の遺跡には、岩橋山塊周辺に鳴神貝塚、岡崎縄文遺跡がある。鳴神貝塚は花山丘陵



第2図 井辺遺跡周辺の遺跡分布図

の西麓緩斜面に位置し、近畿で最初に発見された貝塚として著名である。土器は中期・晩期が多く、石鏃、石錘、磨製や打製石斧が出土し、昭和30年頃にはシャーマンと考えられる女性の伸展葬人骨も発見されている。貝塚を構成する貝はハマグリが多く、ハイガイがこれに次いでいる。岡崎縄文遺跡は福飯ヶ峰の西麓に位置している。土器は後期・晩期で、石器は石鏃、石錘、石匙、磨製石斧が出土している。貝塚はハマグリが主体である。鳴神・岡崎両遺跡には淡水系の貝がみられず、当時は内湾にあたると推測される。

弥生時代の遺跡には、当遺跡の南側に隣接する神前遺跡があり、また北西約2kmには秋月遺跡や太田・黒田遺跡などがある。神前遺跡は前期からの遺跡として知られ、弥生時代前期末葉から中期の溝や水田、小畦畔のほか、後期の溝などが検出されている。太田・黒田遺跡では弥生時代前期末の環濠とその内側に前期から中期の竪穴建物や井戸などがみられ、中期の段階で集落として発達したと考えられる。また遺跡の西側辺縁部では水田や小畦畔なども検出し、直柄広鋏や一本平鋏などの木製農耕具も出土している。その他の遺物としては、銅鐸、銅鏡、銅鏃などの金属器や絵画土器を含む多量の弥生土器が出土している。秋月遺跡では、弥生時代前期の石器製作にかかわると考えられる土坑や中期の溝が確認されている。

古墳時代の集落としては、弥生時代から続く神前遺跡、井辺Ⅰ、Ⅱ遺跡、秋月遺跡、鳴神遺跡群があり、弥生時代後期にいったん途絶えた太田・黒田遺跡でも再度集落が営まれている。秋月遺跡では、庄内式併行期の方形竪穴住居が3棟重複する形で検出されており、そのうち1棟は一辺7.8mを測る大型住居である。鳴神遺跡群では、竪穴住居や掘立柱建物のほか、古墳時代前期の灌漑用水路と考えられる大溝が見つかっており、鳴神V遺跡では小区画の水田が8単位検出されている。

古墳の築造は、丘陵上において古墳時代前期から後期にかけての花山古墳群や中期から後期にかけての古墳数700基前後の岩橋千塚古墳群が築造されている。当遺跡の南東に位置する井辺前山丘陵上には前方後円墳9基を含む、約100基を超える古墳からなる井辺前山古墳群が形成され、花山古墳群・寺内古墳群と共に岩橋千塚古墳群の一支群として理解されている。

最近の調査の進展に伴って、丘陵上の古墳群以外にも、平野部で埋没古墳が数多く見つかっている。秋月遺跡において布留式併行期の前方に高円がみられるほか、鳴神V遺跡では微高地上に古墳時代前期から後期の方墳群が築造されている。これらの成果は、鳴神地区遺跡群から秋月遺跡にかけての墓域を含めた集落構造を理解する上で重要な資料である。一方では、神前遺跡の採集資料の整理報告から、本来、神前遺跡と井辺遺跡は一つの集落動態として捉えるべき視点も提示されている。

歴史時代になると、鳴神V遺跡では須恵器円面硯、初期貿易陶磁器、綠釉、灰釉陶器など奈良時代から平安時代の官衙的な施設の存在を窺わせる遺物が出土している。太田・黒田遺跡からは白鳳期の軒丸瓦が出土している。この瓦は和歌山市紀伊に所在する上野廃寺出土軒丸瓦に酷似し、国府推定地である府中遺跡出土軒丸瓦とも類似しており、同時期の官衙が存在していた可能性も考えられる。また、奈良時代の井戸祭祀に係る遺物や、平安時代の須恵器円面硯や灰釉陶器などが出土している。鎌倉時代では、太田・黒田遺跡において、井戸や土坑から土師器の皿・台付皿・盤、瓦器などが出土しており、神前遺跡からは曲物桶を井筒とした石組井戸が検出されている。また、室町時代では神前遺跡において、備前焼擂鉢、中国製染付皿、胎土目唐津皿など室町時代末から江戸時代初期の遺物が出土している。

第3節 既往の調査

井辺遺跡における調査は、昭和39年に和歌山市井辺の市営岡崎団地建設に伴う造成工事に際し、旧灌漑用水路の改修工事による掘削溝内において、大野嶺夫氏が弥生時代後期から庄内式併行期の土器を多数採集したことを契機とする。

井辺遺跡における既往の調査は、主に和歌山市教育委員会の第1次調査を始めとし、(財)和歌山市文化体育振興事業団・(財)和歌山市都市整備公社により第15次調査まで進められている。小規模な範囲での発掘調査が多い中で、精力的な集落構造の復元が試みられている。

【参考文献】

- 参考文献1：前田敬彦 2008.08「紀伊における弥生時代遺跡の基礎的研究（2）- 和歌山市神前遺跡 - 」『紀伊考古学研究』第11号 紀伊考古学研究会
- 参考文献2：藤藪勝則 2011.01「井辺遺跡と古墳時代初頭の集落」『公開シンポジウム 和歌山平野の集落遺跡 - 弥生時代から古墳時代へ - 』資料集（財）和歌山県文化財センター
- 参考文献3：田中元浩 2011.01「神前遺跡と水路の整備」『公開シンポジウム 和歌山平野の集落遺跡 - 弥生時代から古墳時代へ - 』資料集（財）和歌山県文化財センター
- 参考文献4：田中元浩 2011.07「神前・井辺遺跡の発掘調査 - 地形環境からみた和歌山平野の集落動態 - 」『近畿弥生の会 第14回集会 京都場所』発表要旨集 近畿弥生の会



第3図 既往の調査による井辺遺跡の様相

第3章 調査の方法

調査地は、調査直前までは田圃及び田圃を埋め立てた造成地であり、調査面積は1,812m²である。調査区は東西に3区画に分かれ、東の5区は1,517m²、中央の6区は121m²、西の7区は174m²である。排土の場内処理に伴い、調査地は5・6区を南北に分け、南半を先行して実施し、調査終了後埋め戻し、北半及び7区の調査をした。

表土掘削作業はバックホーで第Ⅰ層の現代の盛土及び近現代の水田耕作土、第Ⅱ層の水田に伴う床土を対象とした。第Ⅳ層上面である遺構検出面を保護するため控えをとり作業を行った。

バックホーによる表土掘削後、人力により整形、表土掘削残存土の掘削を行い、基盤層である第Ⅳ層上面で遺構検出を行った。第Ⅳ層面で遺構の掘削、図面・写真の記録作業を行った。

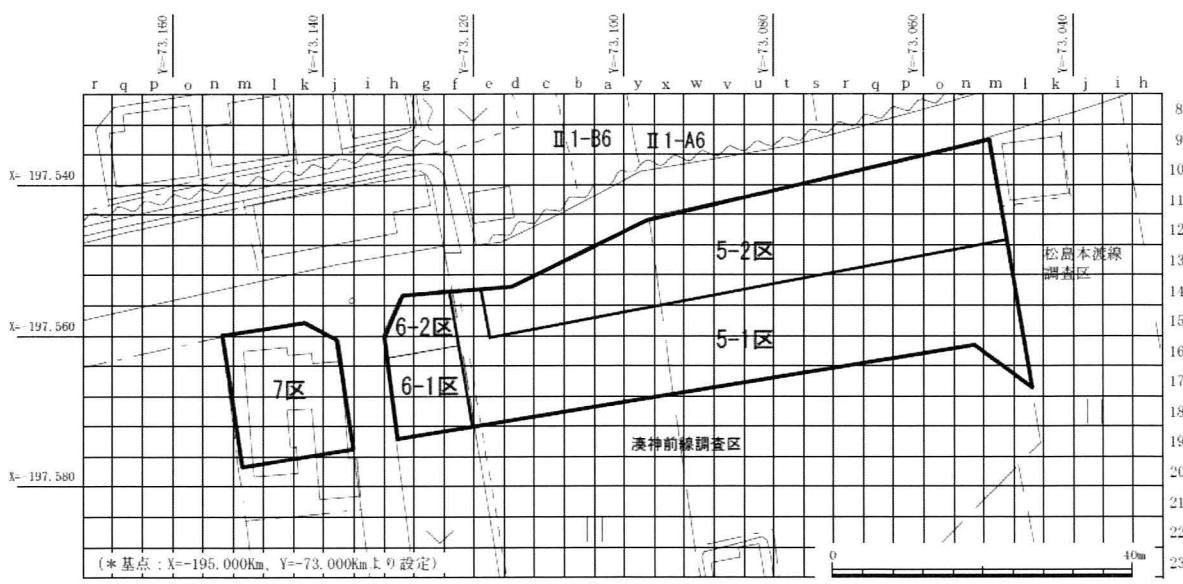
表土掘削終了後に4m間隔のグリッドを表す杭を打設し基準とした。グリッドは井辺遺跡の東端の座標ラインを基準として、将来的な調査を含めた任意の範囲について区画割を行った平成22年度の設定を踏襲した。井辺遺跡・神前遺跡を網羅する範囲の北東隅に基点X-197.000、Y-72.000、を基準とする1km四方の大区画、100m四方の中区画、4m四方の小区画を設定し、本調査地は大区画II-1、中区画A6・B6に位置している。東西方向をY軸、南北方向をX軸とし、Y軸は東から西へa、b・・と、X軸は北から南へ1、2・・と付番した。出土した遺物はグリッド、遺構ごとに取り上げた。

図面実測は、必要に応じて個別の遺構平面図、断面図を縮尺1/10・1/20で実測し、標高は東京湾標準潮位T.P.+値を使用した。写真撮影は、写真用足場により各遺構面で全景写真撮影を、調査の過程で個別遺構の撮影を行った。

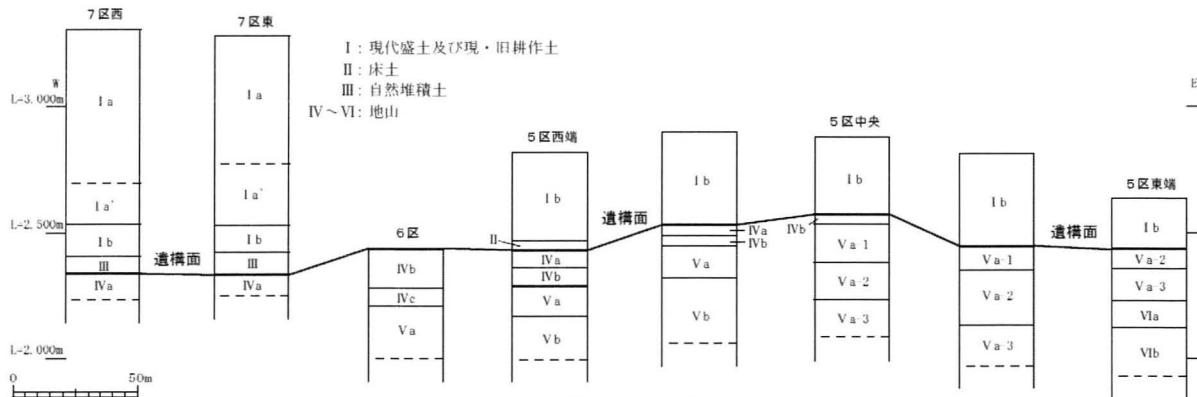
第4章 基本層序

調査区の基本層序は、県文化遺産課が行った確認調査・試掘調査の層序との対応を試み、土層番号は、鍵層になる層の総称として「第Ⅰ層」「第Ⅱ層」・・とする。また、鍵層を土色等により細分し、基本層の後にアルファベットの小文字を付し「第Ⅳa層」「第Ⅳb層」・・とする。

基本的な層序は、6層に大別できる。



第4図 グリッド設定図



第5図 基本層序

第Ⅰ層 現代の盛土、現代及び近代の耕作土である。概ね4層に細分した。Ia・Ia'層は宅地造成に伴う盛土である。Ib層は現代の耕作土である。Ic層は7区で部分的に確認した褐灰色の粗砂である。Id層は旧耕作土で調査区の全域で部分的に確認できる。機械掘削対象土である。

第Ⅱ層 現代および近代の水田耕作土に伴う床土である。機械掘削対象土である。

第Ⅲ層 単純1層とみられる自然堆積層である。7区で良好な状態で遺存する。人力掘削対象土である。

第Ⅳ層 遺物を包含しない調査地の基盤層であり、上面で遺構が検出できる。5区の中央が最も標高は高く、東西にかけて緩やかに下降する。土色等により3層に細分した。第Ⅳa層は5・6区で確認した、黄色系のシルト・細砂である。第Ⅳb層は5・7区で確認した灰色の細砂である。第Ⅳc層は6区で確認した黄褐色のシルトである。この層位より下位には、今回の調査で多数検出された地震の液状化に関する噴砂に起因する粗砂細礫層が存在する。

第Ⅴ層・VI層 第Ⅳ層より下位の地山である。第Ⅴ層は黄色系のシルトから粗砂で調査区の全域で確認し、概ね3層に細分した。第VI層は5区で確認した黄色系のシルトで、2層に細分した。

第5章 調査の成果

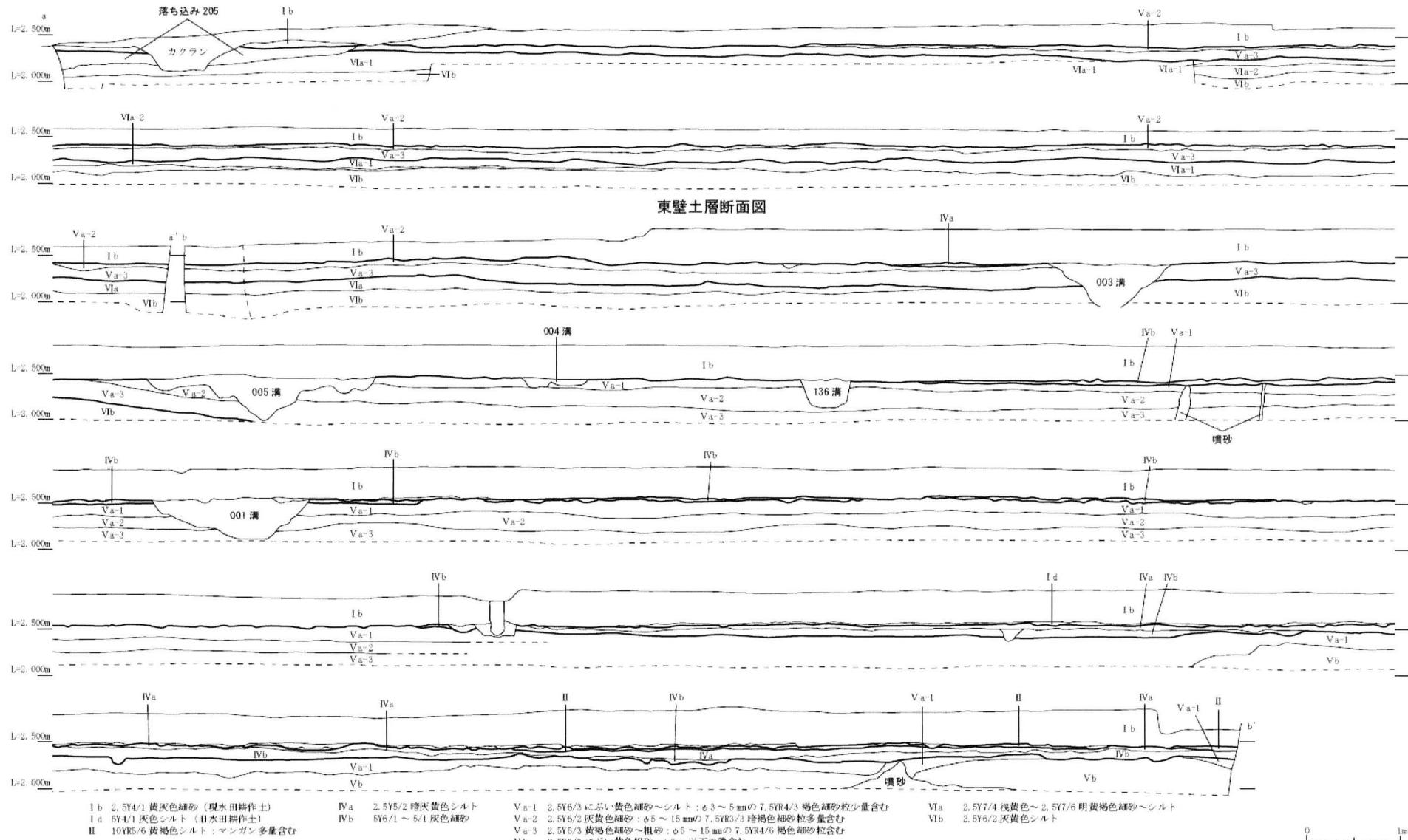
第1節 5区の調査（調査面積1,517m²）

検出遺構は、弥生時代終末期から古墳時代中期にかけてのものを主体とし、竪穴建物3棟・掘立柱建物1棟・柱穴・溝・土坑・ピット・土坑列などを検出した。一部において鎌倉時代や江戸時代に帰属する遺構を検出した。また、調査区全域において地震痕跡としての噴砂を多数検出した。

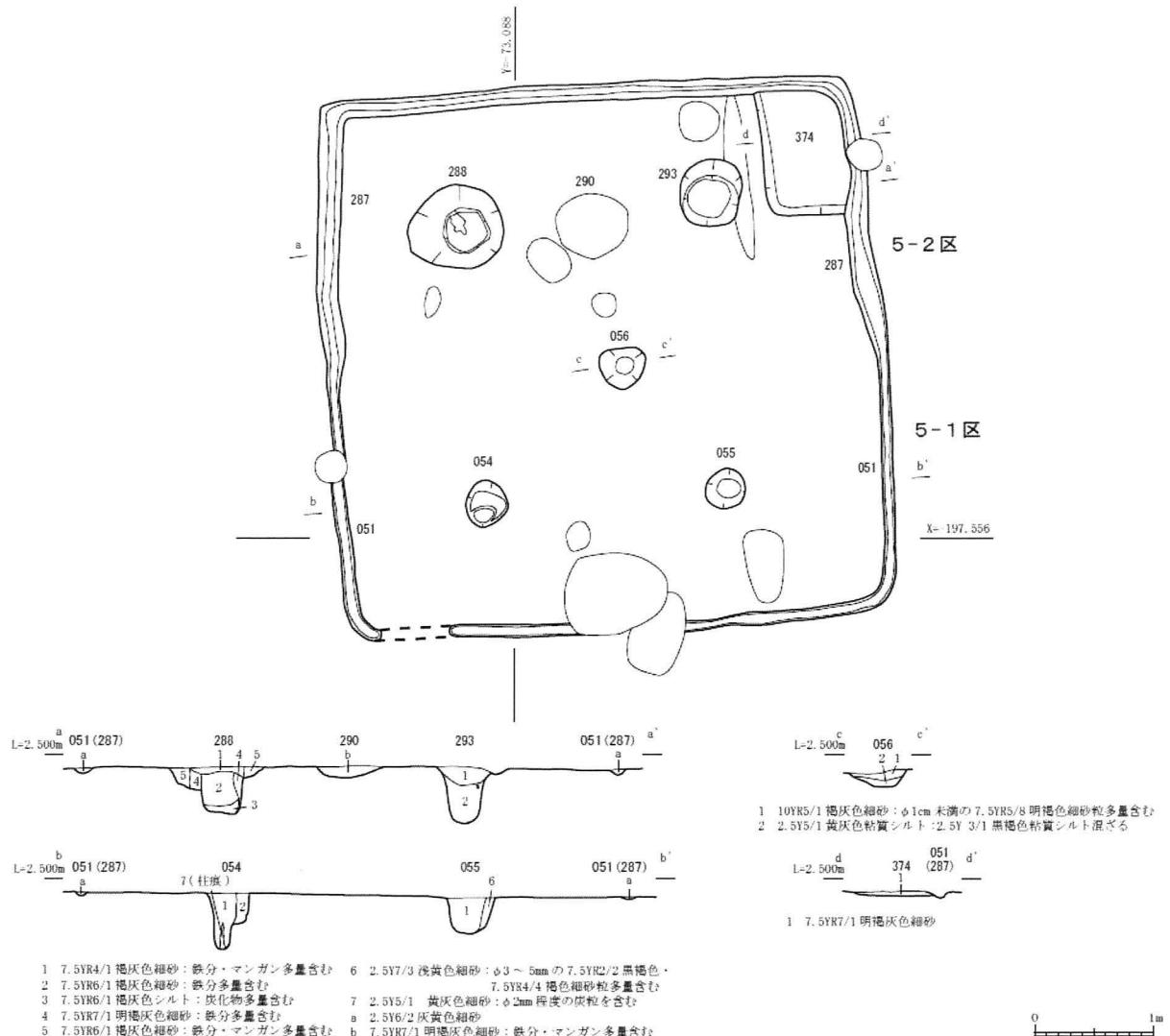
(1) 建物跡 調査区の中央の微高地に集中して、竪穴建物3棟、掘立柱建物1棟を検出した。また、調査区の中央北端において東西約3.0mの竪穴状の遺構を検出したが、遺存は悪く、ごく一部を検出できたのみであるため、定かではない。

竪穴建物1 5-1・2区をまたいでほぼ中央のA6-v・w14で検出した。主柱穴4基(054・055・288・293)、周壁溝051(287)、中央炉056、貯蔵穴374で構成される。

平面形は、東西約4.6m、南北約4.5mの方形を呈する小形の竪穴建物である。建物の主軸方向は、N-3°-Wではほぼ正方位である。



第7図 5区 土層断面図



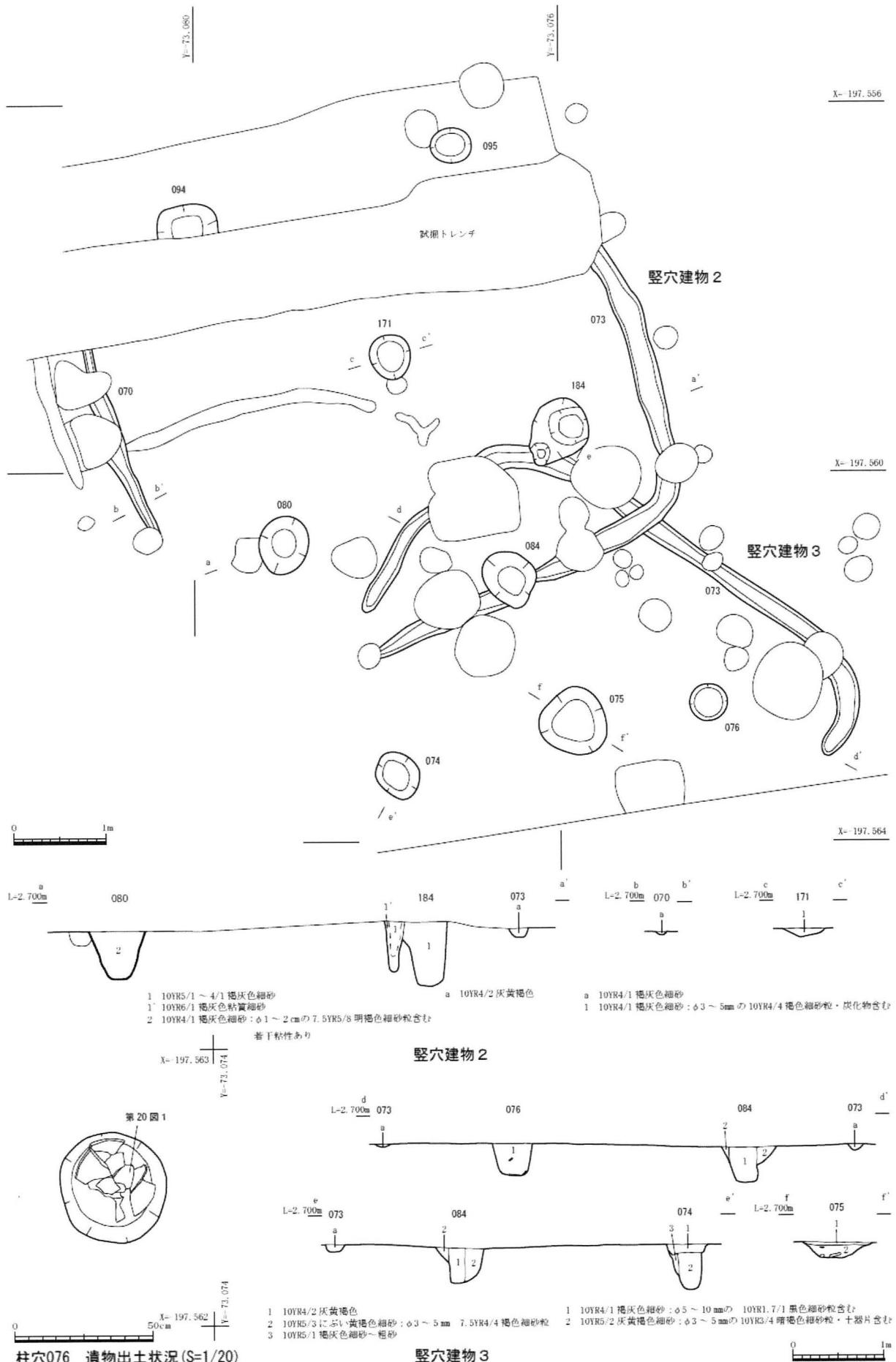
第8図 壇穴建物1

主柱穴の柱間は2.30～2.40mであるが、柱穴054・055間が2.00mと他より狭い。柱穴の規模は径0.35m～0.8m、深さは0.29～0.45mと様々である。北西側の柱穴288が最も大規模で、長軸0.80m、短軸0.70m、深さ0.40mで、基底部には、厚さ1cm程度の炭化した礎板が遺存している。床面中央には、径0.40m、深さ0.10mの円形の炉056が位置する。壁の遺存は壁溝のみで、一部が遺存しない。幅0.10～0.20m、深さ0.03～0.05mと極めて浅い。床面の北東側では、壁溝を埋めた後に構築された貯蔵穴と思われる土坑を検出した。長軸1.00m、短軸0.70m、深さ0.03mの浅い窪み状を呈するものである。

遺物は、柱穴の埋土からと僅かに床面から出土するのみである。

壇穴建物2 5-1区の壇穴建物1から南東に約2m離れたA6-s・t15・16で検出した。壇穴建物3の北側に位置し、重複関係から壇穴建物3より新しいと判断できる。主柱穴2基(080・184)と周壁溝070(073)で構成される。遺存状態が悪く、建物の南側の一部のみ確認できた。中央で検出されたピット171と試掘トレンチ内で検出されたピット094・095は位置的にそれぞれ中央炉と主柱穴の可能性が考えられる。

平面形は、東西6.0m、南北4.4m以上と比較的大規模な方形を呈する。主軸方向は、N-19°-Wである。柱穴080・184間は3.30mであり、その他の主柱穴と考えられる柱間は3.0m～3.5mで



第 9 図 墓穴建物 2・3

ある。規模は柱穴080が長軸0.66、短軸0.55、深さ0.53mである。柱穴184は西側に柱状の痕跡が確認できるが、東側がより規模が大きく深い。規模は長軸0.78m、短軸0.62m、深さは東側で0.70mである。壁溝のみ遺存しており、幅0.10～0.24m、深さ0.05～0.10mで北半分は遺存していない。

遺物は、柱穴の堆積埋土から弥生土器が出土するのみである。

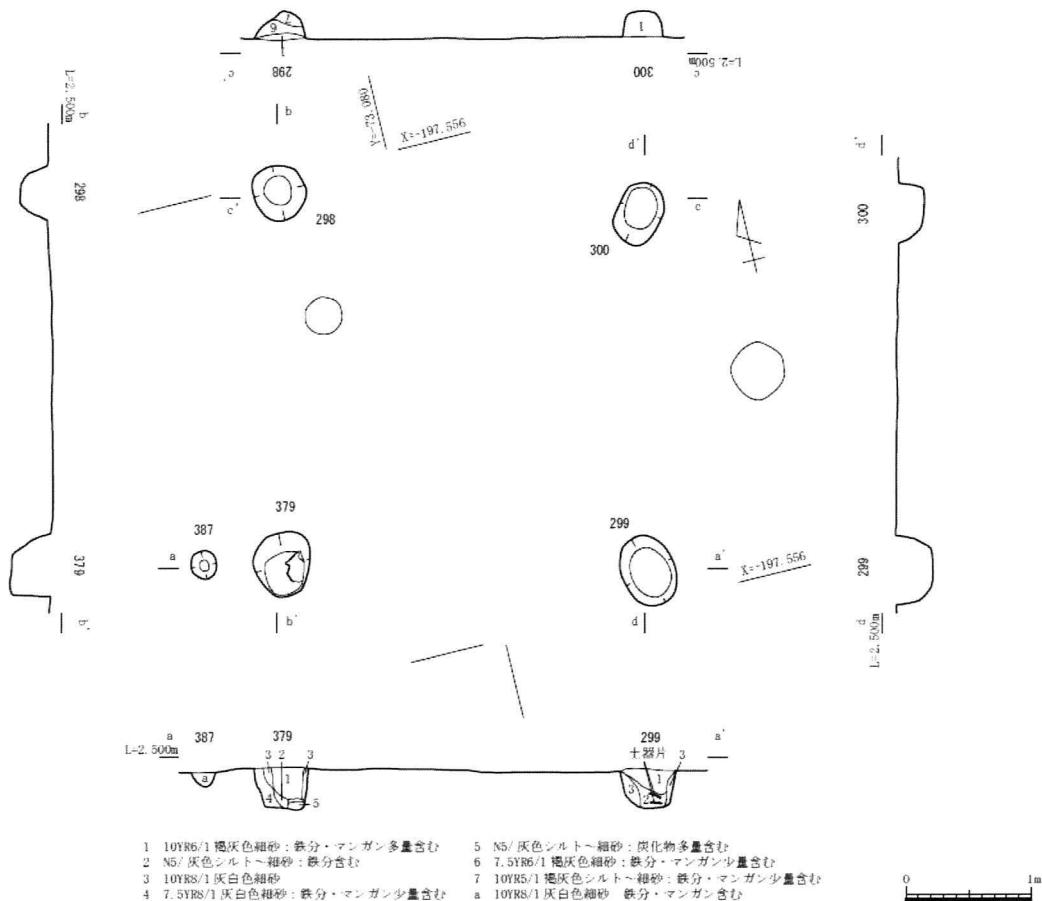
竪穴建物3 A6-s・t16で竪穴建物2の南に重複して検出された。主柱穴3基(074・084・076)、周壁溝073で構成される。遺存状態が悪く、建物の北東側の一部のみ確認でき、南東側は調査区外に位置している。床面中央で検出した土坑075は中央炉の可能性が高い。

平面形は、北西・南東5.3m以上、北東・南西2.6m以上の規模で、やや大きな平面方形を呈する。主軸方向は、N-30°-Eである。主柱穴の柱間は2.50mである。柱穴の規模は径0.42～0.6m、深さ0.3m～0.5mである。土坑075の形状は楕円形、規模は長軸0.75m、短軸0.70m、深さ0.16mである。壁溝のみ遺存しており、北東側3分の1が遺存するのみである。壁溝は、幅0.16～0.24m・深さ0.03～0.05mである。

遺物は、柱穴076から壺(第20図1)が出土しており、弥生時代終末期に相当すると考えられる。また、竪穴建物2・3の検出面から砥石(第20図2)が出土している。

掘立柱建物 5-2区の竪穴建物1から約6m北東に離れた、A6-t・u12で検出した。柱穴4基(298・300・299・379)で構成されている。規模は約2.90mの比較的整った方形を呈し、主軸方向はN-12°-Eである。

柱間は2.90mで柱穴379・298間のみ3.00mとなり他より広い。南西側の柱穴379は、長軸



第10図 掘立柱建物

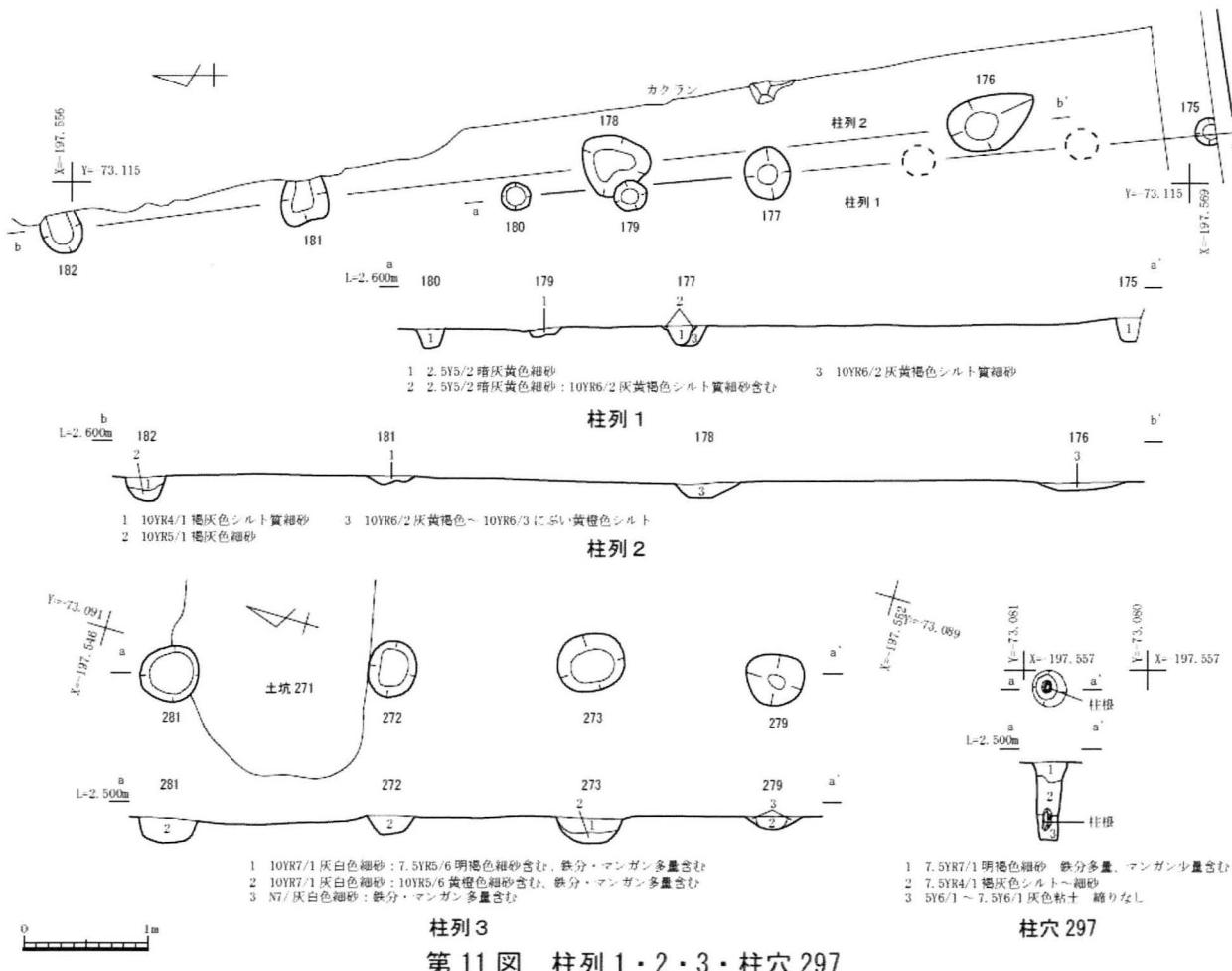
0.52m、短軸0.46m・深さ0.34mの円形を呈している。基底部には、厚さ1mm程度に劣化した炭化礎板が遺存していた。

遺物は柱穴299から高坏（第20図3）柱穴300から同一個体と思われる甕（第20図4・5）柱穴379から甕（第20図6）が出土しており古墳時代前期と考えられる。

(2) 柱穴 柱穴は、竪穴建物や掘立柱建物が検出された周辺に比較的多く、散在的ではあるが数箇所に纏まる傾向がある。竪穴建物の残穴や掘立柱建物としての柱並びを捉えられるまでに至っていない。5-1区の西側において、近世以降と推測される柵状遺構2列を検出した。西端で検出された柱列1・2は南北方向に並ぶ傾向にあるが、判然としない。

柱列1 5-1区のB6-d16～18で、約5.6m分を検出した。柱列2の西に接しており、重複関係から柱列2より新しいと判断できる。南は調査区外のため、正確な規模は不明である。主軸方向はN-5°-W、柱間は0.9～1.1mで柱穴4基（175・177・179・180）が遺存している。柱穴の規模は径0.21～0.38m、深さ0.07～0.18mと小規模である。遺物は柱穴175の埋土から弥生土器小片1点が出土するのみである。

柱列2 5-1区のB6-d16・17で、約7.5m分を検出した。柱列1の東に接しており、重複関係から古いと判断できる。南は調査区外のため、正確な規模は不明である。主軸方向はN-5°-W、柱間は2.0～2.9mと不均等であり柱穴4基（176・178・181・182）が並ぶ。柱穴の規模は径0.33～0.72mの楕円形で、深さ約1.0mである。遺物は出土していない。



柱列3 5-2区の堅穴建物1の北東側A6-w12・13で、約4.9m分を検出した。主軸方向はN-17°-W、柱間は1.5～1.75mで柱穴4基(272・273・279・281)が並ぶ。柱穴の規模は径0.40～0.54mの円形又は橢円形で、深さは0.1～0.19mと浅く、遺存状態は悪い。遺物は柱穴の埋土から僅かに出土するのみである。

柱穴297 5-2区の掘立柱建物の内側A6-u12で検出した。形状は円形、規模は径0.30m、深さ0.62mである。堆積は4層に分かれ、中央部下層に柱根直径0.08m、長さ0.19mが遺存していた。柱根の先端部は、二方向からの切断痕が明瞭に遺存する。遺物は弥生土器が1点出土している。

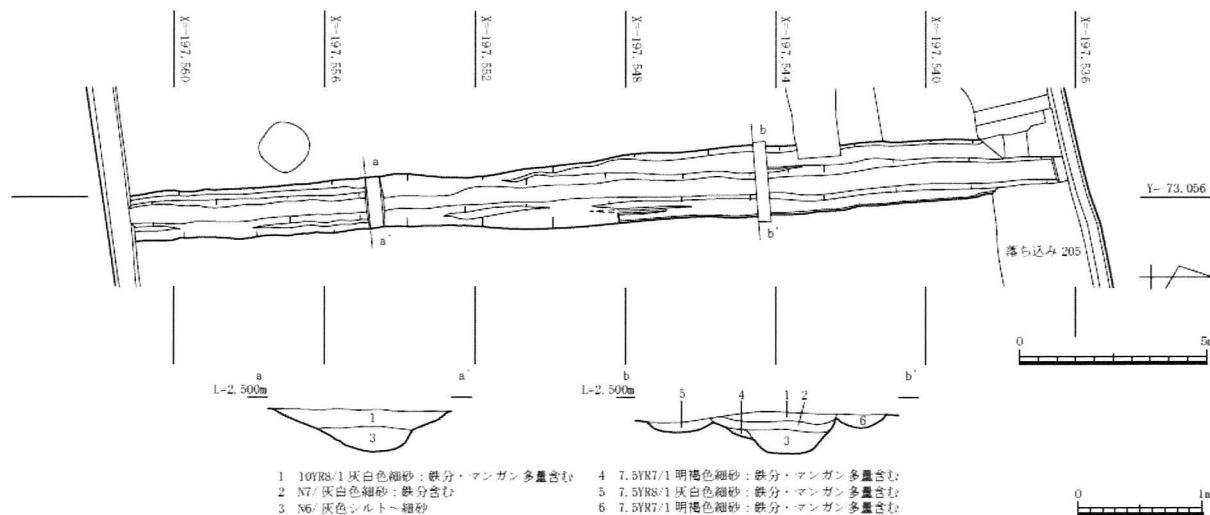
(3) 溝 調査区の東側で溝3条、中央から西側にかけて溝状の遺構3条を検出した。東端の溝003が最も規模が大きく、その他は小規模である。いずれも南北方向の溝である。

溝003 調査区の東端で検出した南北方向の溝である。重複関係にある落ち込み205より古いと判断できる。5-1区では1条の溝として掘削したが、5-2区の調査で3条の溝が重複することが確認された。形状は直線状で、幅1.36～1.9mの延長約26m分を検出し、主軸方向はN-5°-Wである。中央の溝が新しく幅1.00m、深さ0.30m、東側の溝は幅0.40mが遺存、西側の溝は幅0.50m、深さ0.10mが遺存している。壁面はいずれも緩やかに立ち上がる。南北は調査区外に延び、北から南方向へ流水していたものと考えられる。

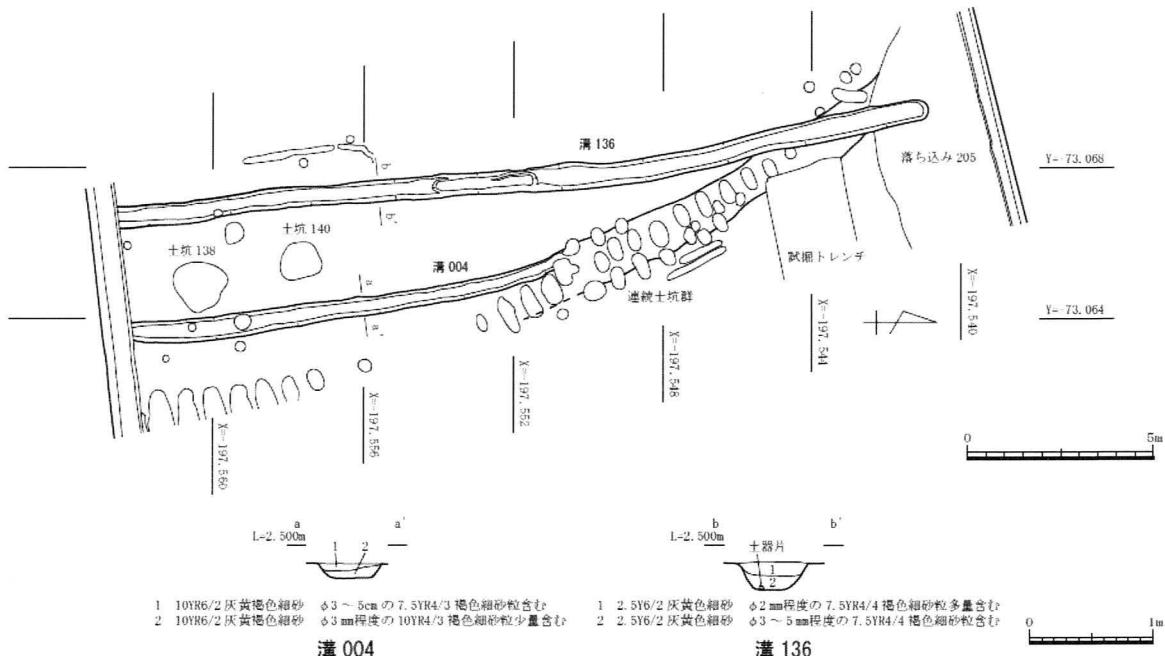
遺物は、弥生時代終末期から古墳時代中期のものが出土している。下層から中層にかけて終末期の広口壺(第20図7)高坏(第20図8)製塩土器(第20図9)が出土している。上層からは、古墳時代中期の須恵器(第20図10)が出土している。

溝004 調査区の東側で溝003の西約7.5mで検出した。北側は溝136、連続土坑群、落ち込み205と重複関係にあり、いずれよりも古いと判断できる。形状は直線状で、北側で西方に傾く。幅0.50m、深さ0.12m、延長22m分を検出した。壁面は緩やかに立ち上がる。遺物は高坏(第20図11)と把手(第20図12)が出土しており、古墳時代前期と考えられる。

溝136 調査区の東側で溝004の西に近接して検出した南北方向の溝である。重複関係から落ち込み205より古く、土坑列、溝004より新しいと判断できる。形状は直線状で、幅0.22～0.54m、



第12図 溝003



第13図 溝004・136

深さ0.23m、延長22m分を検出した。壁面は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。遺物は弥生土器が出土しているが、いずれも小片である。

(4) 土坑 調査区の全域で検出されたが、中央から東側に多く、比較的大規模な土坑も多い。最大のもので土坑207の長軸2.47m、短軸2.10mがある。深さは様々であるが、0.20m以下の土坑も多い。また溝004と一部重複する形で南北方向に並ぶ土坑群を検出している。

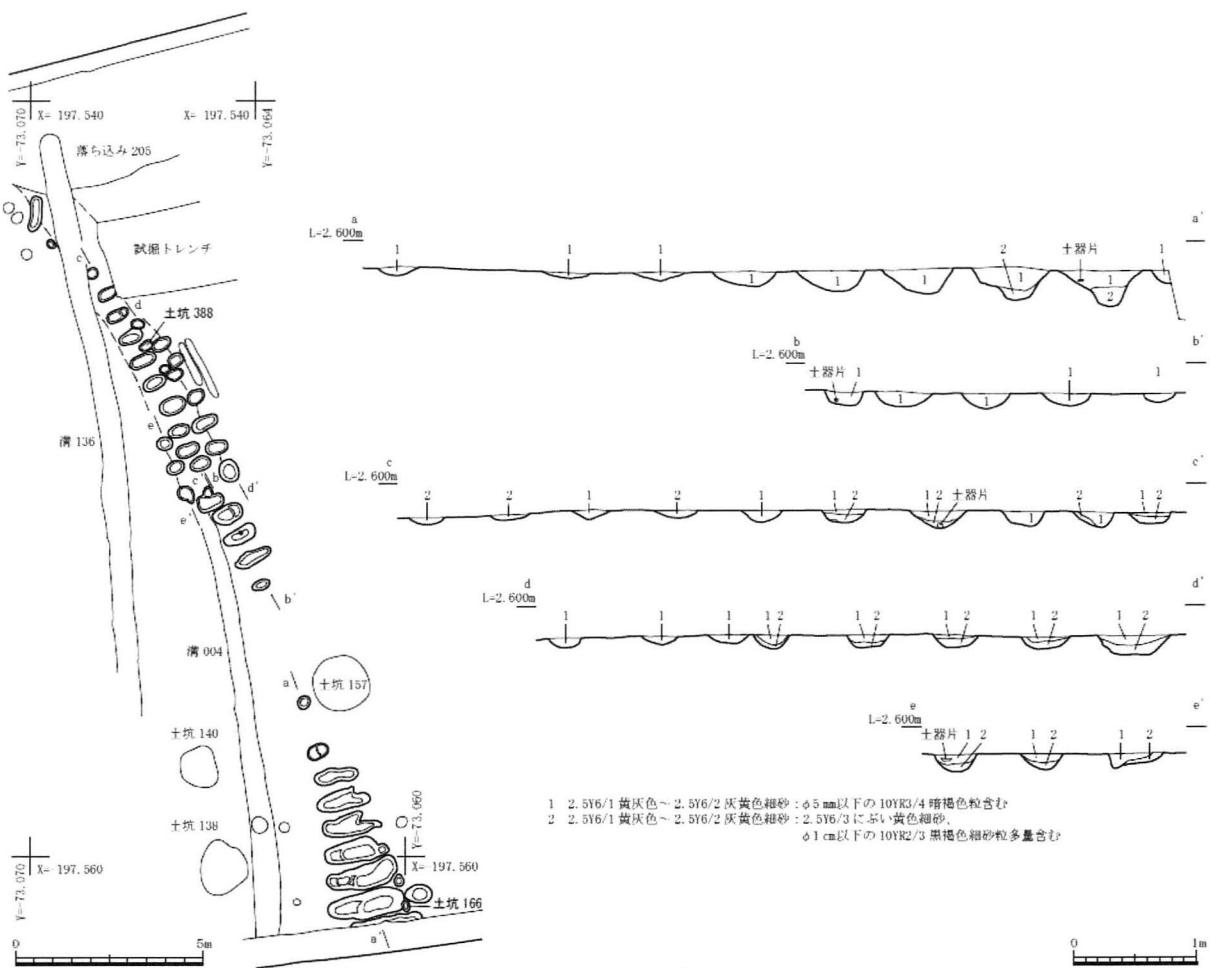
連続土坑群 調査区の東側で検出し、古墳時代前期の溝004より新しく、溝136、落ち込み205より古いと判断できる。南北方向にやや弧を描きながら1~3列に並行している。

土坑の形状はいずれも楕円形で、規模は長軸1.40m、短軸0.50mが最大で、長軸0.36m、短軸0.26mが最少となる。深さは0.08~0.14mと比較的浅い。これらの土坑は一定の間隔で規則的に並ぶ。中央部において一部重複して検出されたが、時期的な違いはないと推測される。

遺物は高環（第20図13）土錘（第20図14）、須恵器、土坑388からは銅鏡（第20図15）が出土している。遺構の帰属時期は、切り合いなどから古墳時代前期以降と考えられる。

土坑039 5-1区のA6-y16で検出した。形状は不整形、規模は長軸0.90m、短軸0.34~0.56m、深さは東側が1段深く0.13mである。遺物は高環（第20図16）が出土しており、古墳時代前期と考えられる。

土坑052 5-1区のA6-v15で検出され、竪穴建物1の南壁溝と重複関係にあり新しいと判断できる。形状は楕円形、規模は長軸0.85m、短軸0.69m、深さ0.35mである。底面は平坦で、壁面は急角度で立ち上がり、東側は上方で緩やかに立ち上がる。堆積は3層に分かれ、中央の2層に焼土塊を多く含む。遺物は小型の壺（第20図17）鉢（第20図18）が出土しており、弥生時代後期末葉から古墳時代前期と考えられる。



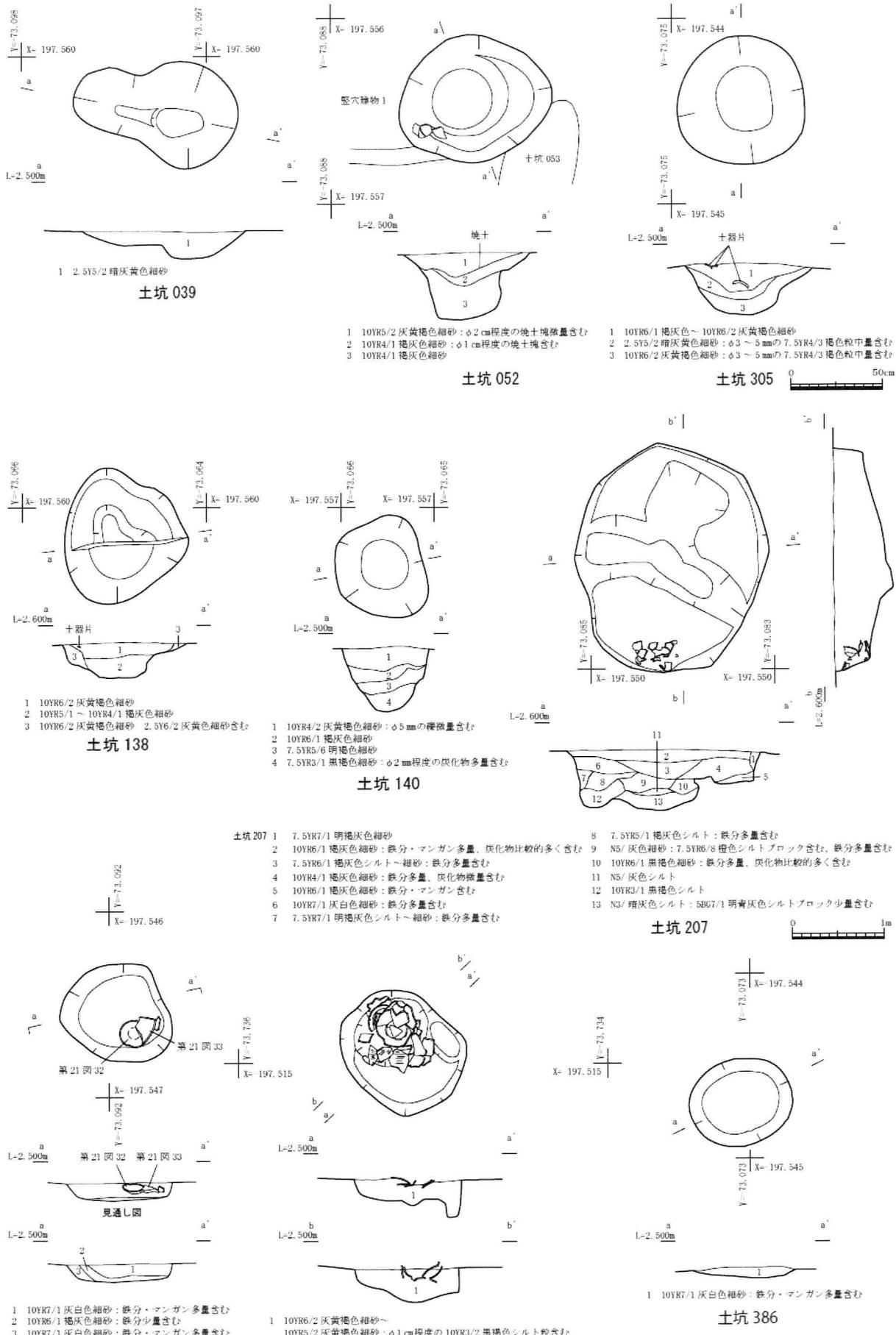
第14図 連続土坑群

土坑138 5-1区のA6-q15・16で検出し、溝003・溝136の間に位置している。形状は不整形、規模は長軸1.46m、短軸1.33m、深さ0.38mと比較的大規模である。壁面は西側で急角度に立ち上がり、東側は底面から急角度に立ち上がり、一端面をなし、緩やかに立ち上がる。堆積は3層に分かれ、壁面近くから堆積し、その後中央部が堆積したと推測される。遺物は甕（第20図19）が出土しており、弥生時代終末期と考えられる。

土坑140 5-1区のA6-q15・16で検出し、溝003・溝136の間に位置している。形状は隅丸方形、規模は長軸1.11m、短軸0.94m、深さ0.70mと比較的大規模である。壁面は急角度で立ち上がる。堆積は4層に分かれ、最下層には炭化物が多く含まれている。遺物は甕（第20図20）高坏（第20図21）が出土しており、弥生時代終末期と考えられる。

土坑207 5-2区のA6-u・v12・13で検出した。形状は楕円形、規模は長軸2.47m、短軸2.10m、深さは西から中央にかけて最も深く0.66mである。壁面は底面から立ち上がり、一端テラス状に面をなす。上部は急角度に立ち上がり、底面には凹凸がある。遺物は南のテラス状の面に集中しており、甕（第20図22）壺（第20図23・24）高坏（第20図25～29）が出土している。弥生時代終末期～古墳時代前期と考えられる。

土坑305 5-2区のA6-s12で検出した。形状は円形、規模は径0.70m、深さ0.27mである。壁面は急角度で立ち上がり、東側上位では緩やかに立ち上がる。堆積は3層に分かれ、上層から遺物が多く出土している。遺物は甕（第21図30）壺（第21図31）が出土しており、弥生時代後期末葉と考えられる。



第15図 土坑

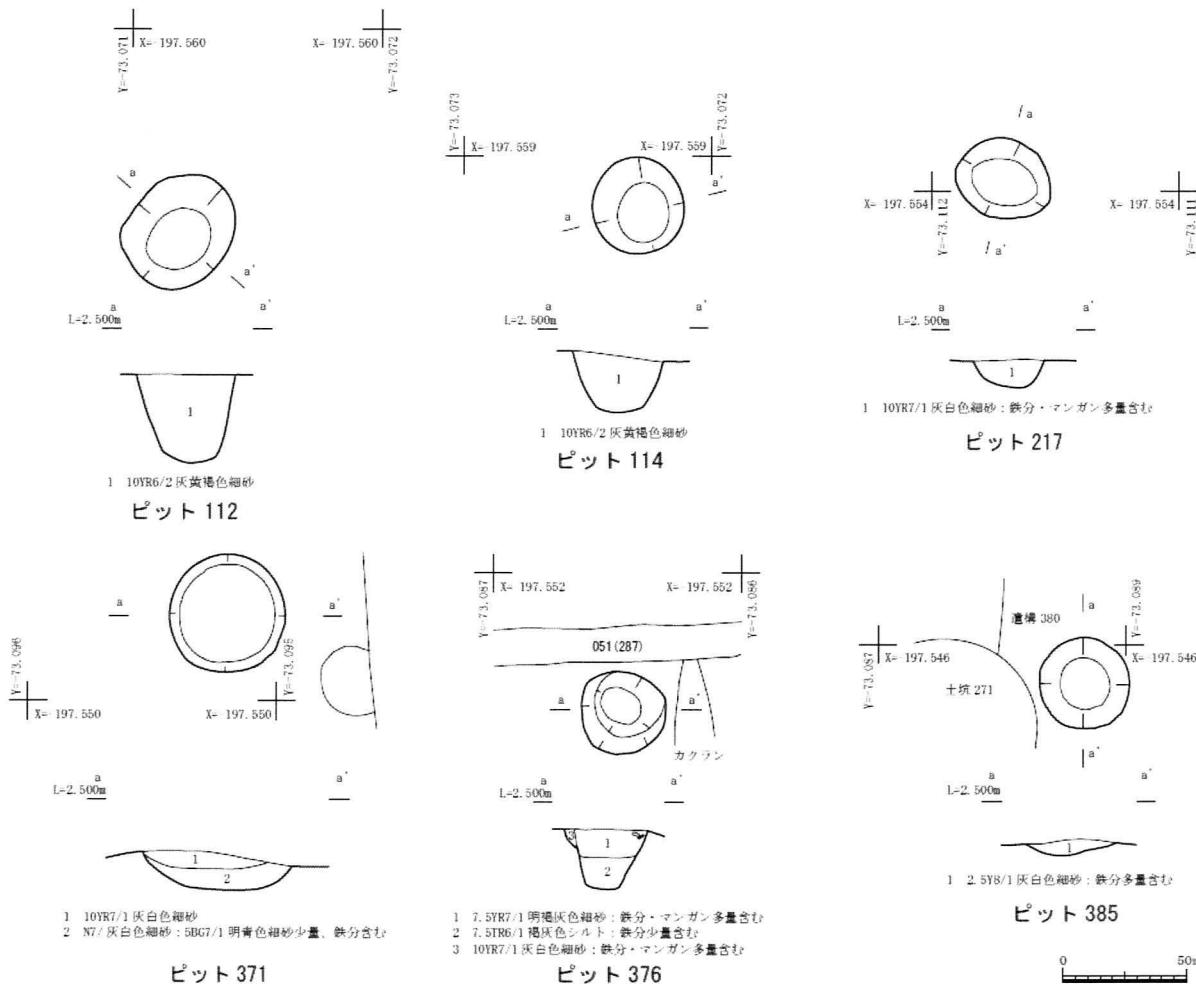
上坑375 5-2区のA6-w・x12で検出した。形状は不整円形、規模は長軸1.20m、短軸1.04m、深さ0.18mである。壁面はやや緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。遺物は南側底面から壺（第21図32）高坏（第21図33）が出土しており、弥生時代終末期と考えられる。

上坑382 5-2区のA6-s 11で検出した。形状は楕円形、規模は長軸1.38m、短軸1.14m、深さ0.24mである。壁面は緩やかに立ち上がり、底面はやや凹凸がある。底面東側がピット状に1段深くなっている。深さは0.40mである。凹凸による堆積土の違いは認識できず単一層である。遺物は北側の検出面直下から甕（第21図34～37）など集中して出土しており、弥生時代終末期と考えられる。

上坑386 5-2区のA6-s 12で検出した。形状は楕円形、規模は長軸0.57m、短軸0.46m、深さ0.06mと浅い。遺物は甕（第21図38）が出土しており、弥生時代終末期と考えられる。

(5) ピット 調査区の全域で検出したが、南西部、東端は希薄である。一方、北西部、中央部で多く検出されている。特に竪穴建物周辺では多い傾向にある。大半のピットは深さ0.20m以下である。

ピット112 5-1区のA6-r 16で検出した。形状は楕円形、規模は長軸0.48m、短軸0.40m、深さ0.37mである。遺物は高坏又は器台の裾部（第21図39）製塙土器（第21図40）が出土しており、弥生時代終末期と考えられる。



第16図 ピット

ピット114 5-1区のA6-r15で検出した。形状は円形、規模は径0.75m、深さ0.22mである。遺物は壺（第21図41）が出土しており、弥生時代終末期と考えられる。

ピット217 5-2区のB6-c14で検出した。形状は楕円形、規模は長軸0.39m、短軸0.32m、深さ0.11mである。遺物は甕（第21図42）壺又は甕底部（第21図43）土錐（第21図44）が出土しており、弥生時代終末期と考えられる。

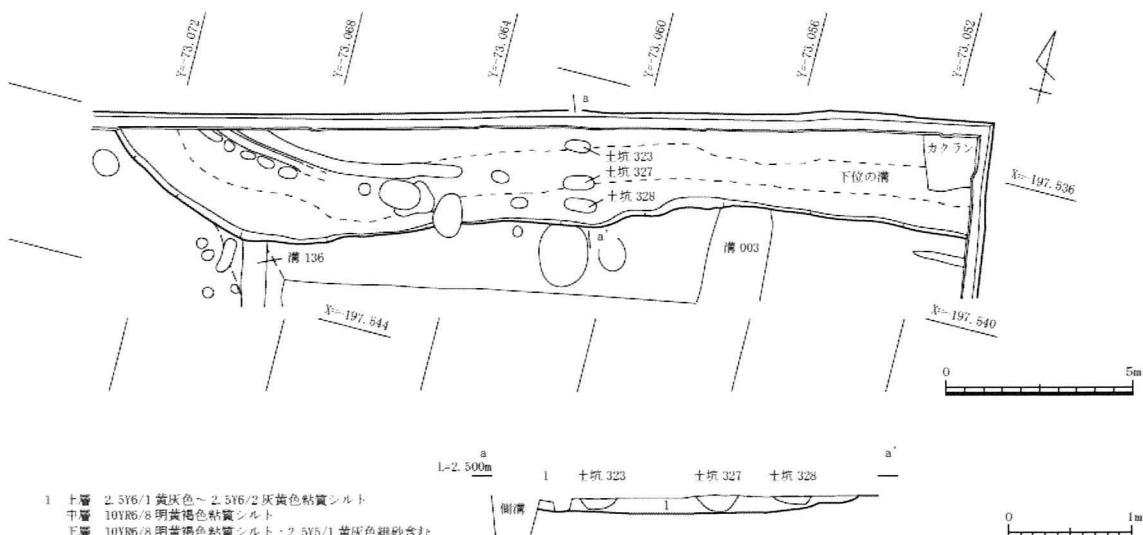
ピット371 5-2区のB6-x13で検出した。形状は円形、規模は径0.46m、深さ0.15mである。堆積は2層に分かれ、下層に鉄分を含む。遺物は壺（第21図45）が出土しており、古墳時代前期と考えられる。

ピット376 5-2区のA6-v14で検出した。形状は円形、規模は径0.33m、深さ0.24mである。壁面は急角度で立ち上がり、南西は角度を変えて2段階に立ち上がる。堆積は3層に分かれ、上層には鉄分、マンガンを多く含む。遺物は高坏（第21図46）が出土しており、弥生時代後期末葉と考えられる。

ピット385 5-2区のA6-w12で検出した。径0.37mの円形で深さ0.06mと極めて浅い。比較的広範囲の凹みの堆積土を掘削後に検出できたため、上面は削平されている。遺物は小型丸底壺（第21図47）が出土しており、古墳時代前期と考えられる。

(6) 落ち込み205 調査区の北西隅において広範囲の落ち込みを検出した。規模は東西22.8m、南北2.5m、深さ0.12mである。北側、東側は調査区外であるため、正確な規模は不明である。堆積は単一層であるが、上層、中層、下層において若干の差異が認められる。埋土は黄色系の粘質シルトで、下層には細砂が含まれる。下位には、同範囲に溝状の遺構、土坑が検出されており弥生土器が出土している。遺物は壺（第21図48）須恵器（第21図49）青磁碗（第21図50）が出土している。

下位の溝状遺構が同範囲に収まることから、地形的に微低地な場所が中世以降の整地に伴い埋められた可能性が考えられる。



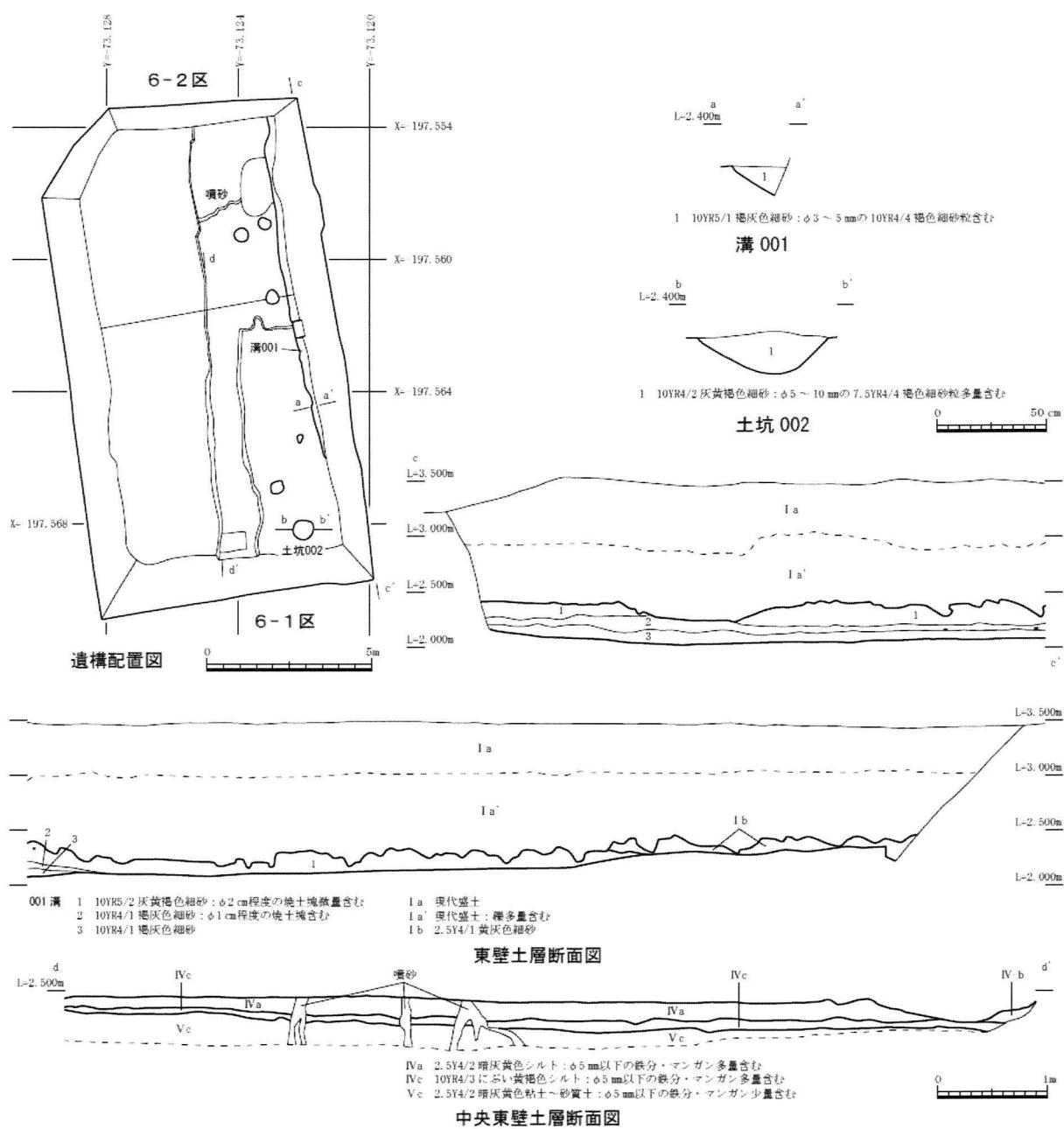
第17図 落ち込み205

第2節 6区の調査（調査面積121m²）

調査区の西側は大きく削平を受けており、遺構を検出した範囲は東側のみである。検出遺構は、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけてのものを主体とし、溝1状、土坑1基、ピット5基を検出した。また、遺構検出面において地震痕跡としての噴砂2条を検出した。

溝001 調査区の東壁に接して検出した南北方向の溝である。正確な形状、規模は不明であるが、最大幅0.60m、深さ0.30m・延長約10.5m分を検出し、南側で調査区外に延びる。主軸方向はN-10°-Wの方向性を示し、現在の地表に現存する条里型地割と同様の方向性を示す。流れの方向は、溝底の僅かな高低差と遺構検出面の傾斜方向から、北から南方に流水すると考えられる。遺物は弥生土器が出土している。

土坑002 調査区の南東端のB6-f16・17で検出した。形状は円形、規模は径0.60m、深さ0.19mである。遺物は弥生土器、須恵器小片が出土するのみである。



第18図 6区 遺構配置図及び土層断面図

第3節 7区の調査（調査面積174m²）

検出遺構は、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけてのものを主体とし、溝1条、土坑5基、ピット31基を検出した。また、同一遺構検出面において地震痕跡としての噴砂数条を検出した。鍵層である、江戸時代に相当すると思われる自然堆積層の第Ⅲ層が比較的良好に遺存している。

溝046 調査区の西側で検出した南北方向の溝である。形状は直線状で、規模は幅0.50～0.70m、深さ0.10m、中央部分は途切れているものの、延長約11m分を検出した。主軸方向はN-10°-Wである。6区で検出した溝001と同様に、現在の地表に現存する条里型地割と同様の指向性を示す。流れの方向は、溝底の僅かな高低差と遺構検出面の傾斜方向から、北から南方向に走行するものである。遺物は、弥生土器が僅かに出土しており、弥生時代終末期に相当すると考えられる。

土坑026 調査区南西のB6-m18・19で検出した。形状は楕円形、規模は長軸0.72m、短軸0.60m、深さ0.20mである。堆積は2層に分かれ自然堆積土と考えられる。遺物は、埋土の中位から遺存状態の悪い弥生土器が出土している。

土坑036 調査区北西のB6-m16・17で検出した。形状は楕円形、規模は長軸1.70m、短軸1.30m、深さ0.10～0.16mである。堆積は単一層で自然堆積土である。遺物は出土していない。他の遺構と埋土の状態から、比較的新しい時期に相当すると考えられる。

第4節 噴砂の砂脈

調査区全域において、地震の揺れに伴う土壤の液状化による噴砂の砂脈を検出することができた。いずれも東西方向に延びる。

5区では調査区の西端、中央東側で検出した。また、他の地区では検出されなかった南北方向の噴砂2条が存在する。大半の噴砂の砂脈は、E-15°-NとE-20°-Nに振れる。溝136との重複関係では、北側の噴砂は新しく、南側の噴砂は削平されていることから、2時期の噴砂が存在することが確認できる。

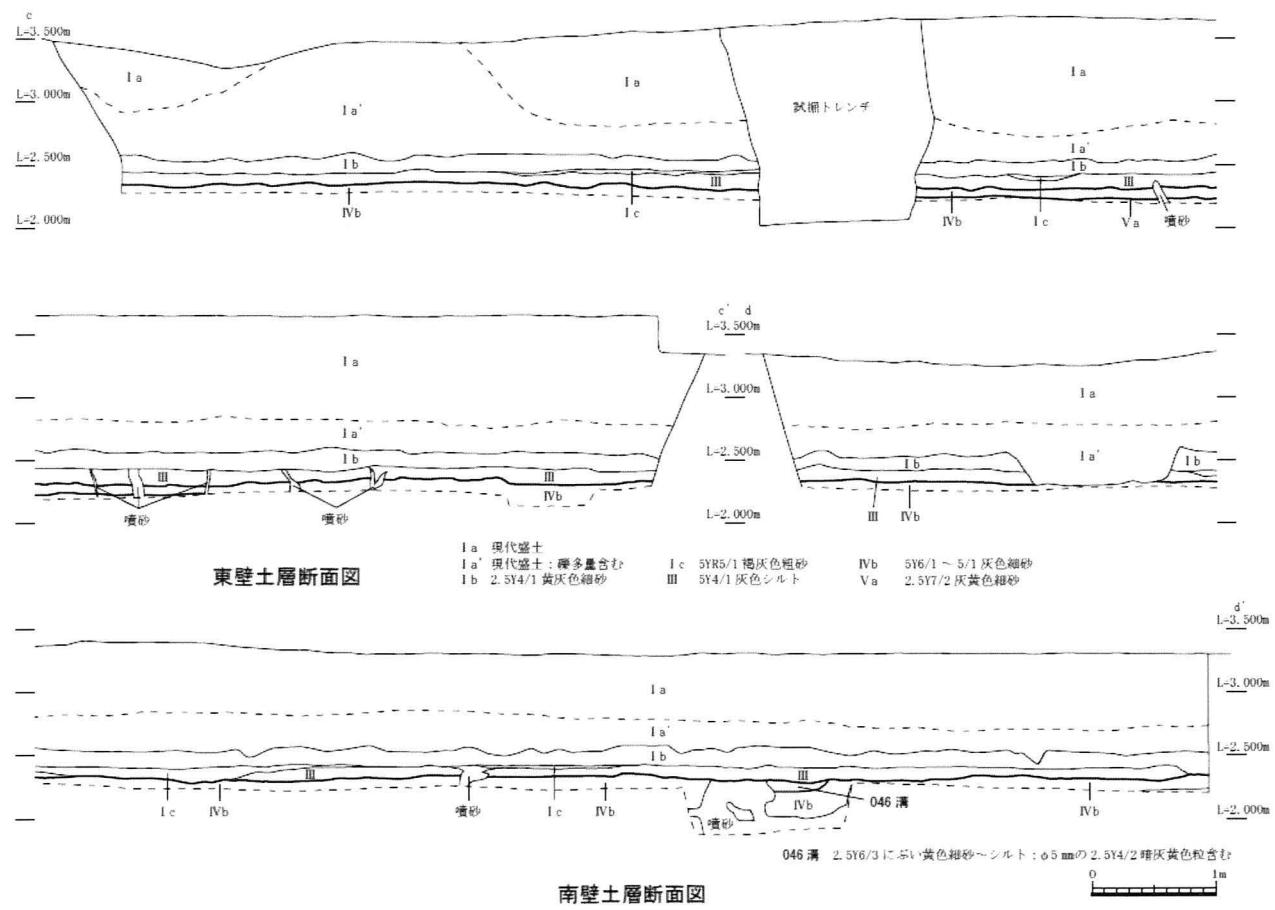
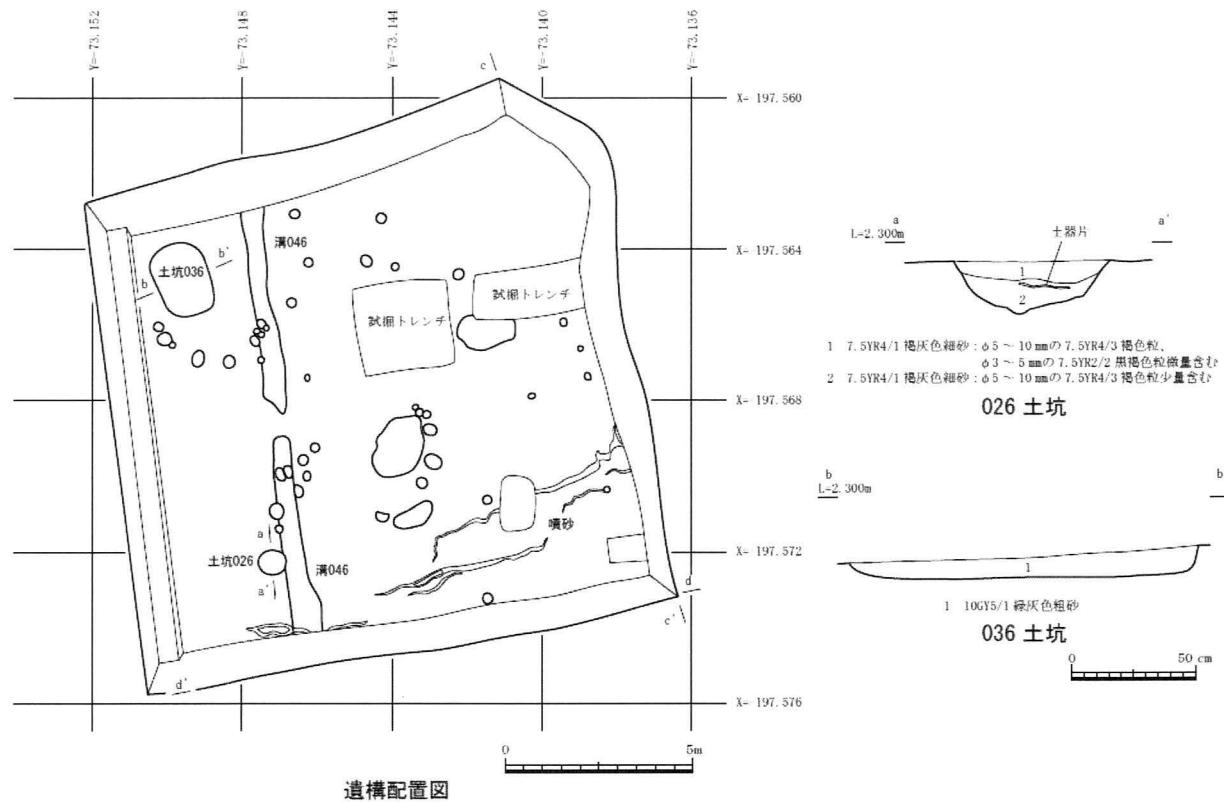
6区では調査区の北側に偏って検出した。砂脈は、溝001と重複関係にあり、噴砂の砂脈を掘り込んで溝001が掘削されている。北側の噴砂の砂脈の走行は、E-20°-N前後の方向性を示す。振れの方向性から7区の北列の噴砂の砂脈の延長と考えられる。

6区では、遺構検出面より0.40m下に噴砂の砂脈の成因となる粗砂細礫層の存在を確認した。

7区では調査区の南側に偏って位置する。砂脈は、大きく東西方向に延び、北列2条と南列2条に区別してみることができる。

北列の砂脈は、ピット6基と重複関係にあり、砂脈を掘り込みピットが掘削されている。第Ⅲ層を切り裂く状況にある。噴砂の砂脈の走行は、E-20°-N前後の方向性を示す。南列の砂脈は、溝046と重複関係にあり、溝046の堆積埋土を切り裂き、第Ⅲ層が覆い被さる状況にある。噴砂の砂脈の走行は、E-15°-N前後の方向性を示す。

調査区全域で検出した噴砂には、上述した2時期の遺構、堆積層との関係の他、近世以降の痕跡が存在することが確認できた。弥生時代終末期から古墳時代前期より新しい時期と江戸時代の自然堆積層である第Ⅲ層より古い時期、江戸時代から現代に相当すると考えられる。



第19図 7区 遺構配置図及び土層断面図

第5節 出土遺物

各遺構からの出土遺物は概ね弥生時代終末期から古墳時代前期のものが大半を占める。各遺構からの出土遺物は小片が多く、時代を判別できる資料を中心に掲載している。なお、遺物の詳細は観察表に記す。

(1) は堅穴建物3の柱穴076から出土した広口壺である。口縁部は「く」の字形に屈曲し、直線的に斜上方に延びる。体部は球形を呈する。(4・5) は掘立柱建物の柱穴300から出土した。同一個体の小型の甕である。「く」の字形に外反する口縁で小型の底部をもつ。内面底部には放射状に工具痕が残り、ナデ調整が施される。(9) は溝003から出土したⅣ式の製塙土器脚台と考えられる。底径は2.2cmと極めて小型で、内外面ともナデ調整を施す。くびれ部から直線的に開き、上げ底状をなす。(13～15) は連続土坑群から出土した。(13) は土坑166から出土した有稜高坏の杯部である。内湾気味に立ち上がり、坏部中位に稜をもち、大きく外反する口縁部をもつ。(17) は土坑052から出土した小型の壺である。口縁部は緩く屈曲し短く外反する、体部は扁球形を呈する。(19) は土坑138から出土した甕底部である。円盤状に退化した底部をもち、体部は球形を呈す。外面はタタキ、底部から体部に黒斑がみられる。(21) は土坑140から出土した。椀形の杯部をもつ高坏の裾部で「ハ」の字形に直線的に開く。穿孔は4箇所である。(22～29) は土坑207から出土した。(22) は甕で「く」の字形に広がる口縁部をもち、口縁端部に刻み目を施す。体部外面には粗いタタキを施す。(24) は広口壺で、大きく外反する比較的短い口縁部をもち、体部は上位が張り出す。(25～29) は高坏である。(25) は浅い皿形の杯部をもち、坏部底面に平らな面をもつ。(26) は脚柱部内面に粘土巻き上げ痕がみられる。ラッパ状に広がる裾部をもち、穿孔は2箇所である。(27) は器壁の薄い「ハ」の字形に開く脚柱部で、器壁は薄く、屈曲して外方に広がる裾部をもつと推測される。(28) は中空の柱状の脚柱部で、屈曲して外方に広がる裾部をもつ。穿孔は3箇所確認できる。(29) は裾端部に面をなし、端部下位は下方に拡張し、上位は上方に拡張し丸く納める。(33) は土坑375から出土した有稜高坏である。坏部の下位に稜をもち、口縁部は長く緩やかに外反しながら外上方に延びる。(34～37) は土坑382から出土した。(34) は「く」の字形に外反する口縁部をもつ甕である。口縁部と体部の胎土は異なり、口縁部形成時に粘土帯を付加したと推測される。口縁部外面は粘土巻き上げ痕跡が残る。(35) は「く」の字形に外反する口縁部をもち、端部は内面から外面にナデ調整を施す。体部外面には粗いタタキを施す。体部及び口縁部内面に黒斑がみられる。(39・40) はピット112から出土した。(39) は高坏または小型器台の裾部である。「ハ」の字形に直線的に開く。穿孔は中位に3箇所である。内面上位に工具痕が残り、下位はナデ調整を施す。(40) はⅡ式の製塙土器である。外面は2次焼成により、淡赤橙色である。脚台はくびれ部から直線的に開き、上げ底状をなし、深鉢状の体部をもつ。(45) はピット371から出土した複合口縁壺で、粘土帯を付加し垂下させ二重口縁を形成し、口縁部下端に波状文を施す。(46) はピット376から出土した高坏柱脚部である。細く短い脚注部からラッパ状に開く裾部をもつ。穿孔は3箇所で、外面には縦方向の丁寧なヘラミガキが施される。(47) はピット385から出土した小型丸底壺である。口縁部は斜上方に立ち上がり、体部よりやや短い。体部は大小のハケ調整が施され、中位が張り、丸底を呈する。

第6章 まとめ

今回の井辺遺跡の調査地は、本調査地の東に隣接する調査地（井辺遺跡－松島本渡線2011年度）の微低地に対して、僅かながら微高地形となることが明らかとなった。この微高地は、既往の調査成果により、集落の分布範囲と土地利用の内容・構成が明らかになってきている。

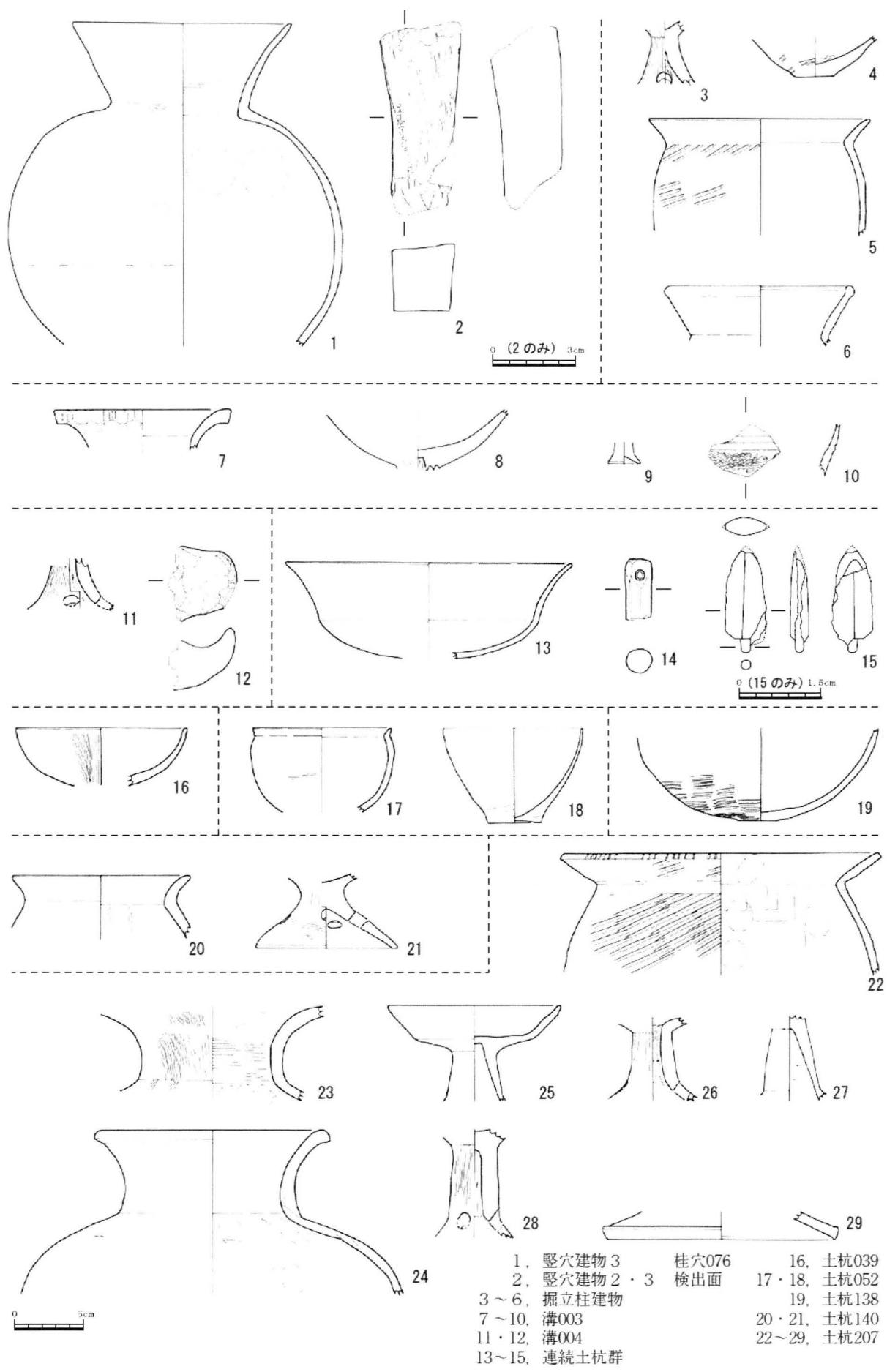
調査の結果、井辺遺跡の西側にあたる調査地周辺には、少数の竪穴建物・掘立柱建物をはじめとする居住域が微高地上に立地していることが判明した。現時点では、井辺遺跡の広大な遺跡範囲内には少なくとも3つ程度の居住域の存在が想定でき、今回の調査成果は、第3図で示した井辺遺跡の西側の居住域とその周辺の一端を明らかにしたと言える。調査地内に限れば、建物跡が検出された位置は、微低地に挟まれた範囲の微高地に限られ、居住域の中で小規模な単位が存在することが想定される。井辺遺跡は、弥生時代後期以降の遺構・遺物が確認されたことから、この頃から集落の形成が始まったものと考えられる。

また、その調査の成果は、東側の丘陵に位置する井辺前山古墳群や岩橋千塚古墳群などの古墳群の築造集団との関係を考える上で重要な資料となる。集落の本体は、井辺遺跡と呼称される範囲の東側や北東側に位置する現集落と重複する県営岡崎団地・井辺団地周辺に立地することが判明しつつあるが、その規模・詳細については、面的な調査が少ない現時点では不明な部分も多い。

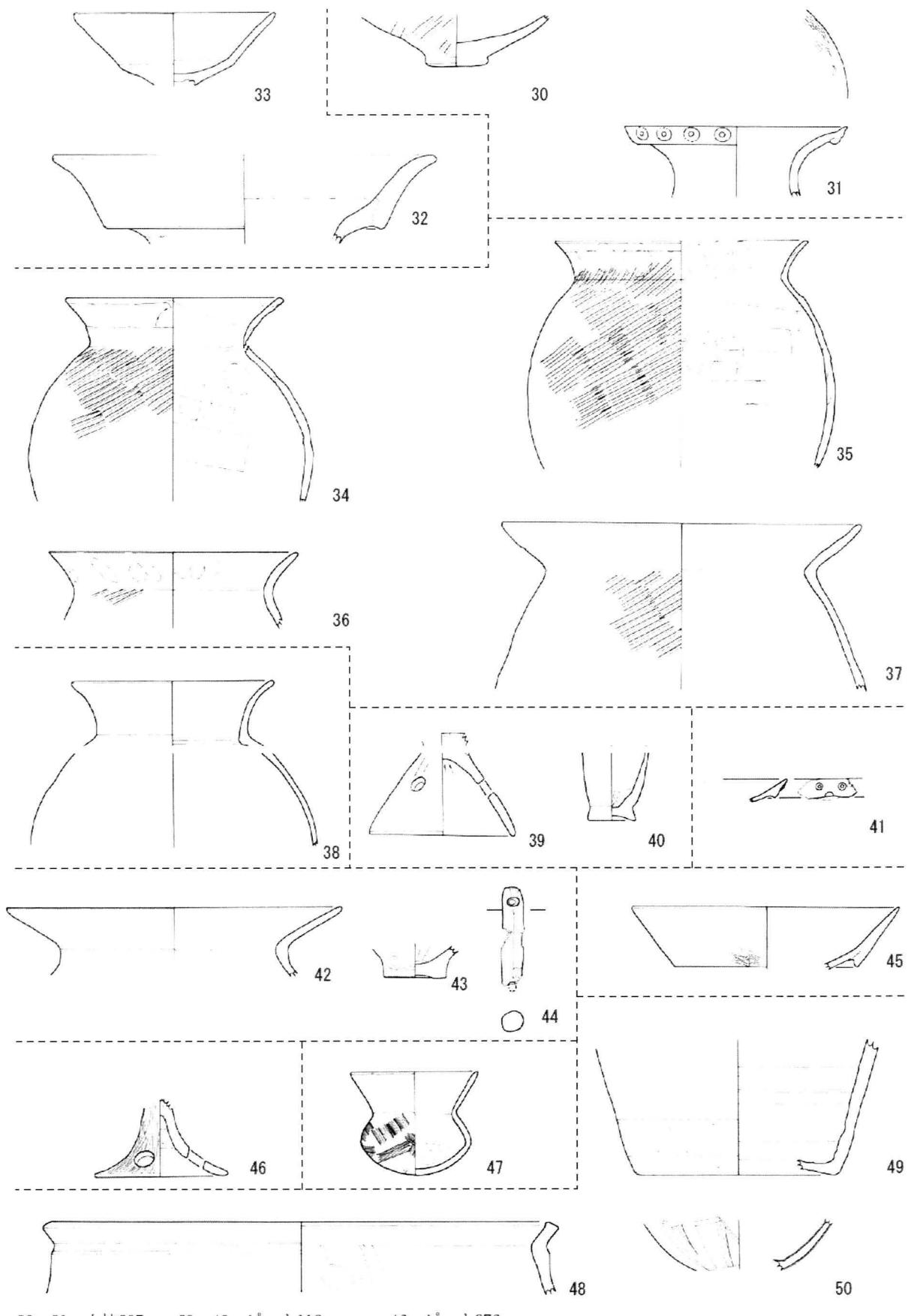
その他、今回の調査の個別的な遺構の課題として、連続土坑群の性格を取り上げなければならない。5区の東側で、南北方向にやや弧を描きながら1列～3列に併行して位置する。一部では、溝004・136と重複する遺構である。井辺遺跡松島本渡線4区でも東西方向に3列検出されている。既往の調査例では、太田黒田遺跡（和歌山市）・川辺遺跡（和歌山市）・藤並地区遺跡（有田川町）・徳蔵地区遺跡（みなべ町）で検出され、古墳時代終末期から奈良時代初頭に位置付けされている。道に伴う下部施設の痕跡と考えられている遺構であるが、今回の調査では当該時期に相当する遺物は出土しておらず、遺構の切り合いなどから古墳時代前期以降に帰属すると考えら、今後の検出例の増加を待って再考する必要がある。

また、生活痕跡ではないが、地震の発生時に引き起こされた下位層の液状化に伴う噴砂の砂脈が多数検出された。検出した遺構・堆積層との重複関係も認められ、弥生時代終末期以前のもの、弥生時代終末期から江戸時代までのもの、江戸時代から現在までのものとして、3時期の噴砂の砂脈と捉えることができ、大まかな時代のものさしの役割も果たしている。下位層の堆積層の確認から、遺構検出面より僅か0.2～0.5m下において、液状化を引き起こした粗砂細礫層が広範囲に及んでいることが確認された。

調査により検出された遺構の帰属時期は、出土した遺物や他の遺構との重複関係から判断される。今回確認された噴砂の砂脈は、遺構の時期を判断する一資料となると同時に、現代の地震に対する防災を考える上において重要な意義をもつものである。



第20図 出土遺物実測図(1)



0 5cm

第21図 出土遺物実測図(2)

出土遺物観察表

掲載番号	登録番号	遺構層位	地区	種類	器種	法量(cm)			残存率	胎土	色調	技法・形態の特徴など	時期
						口径	底部径	器高					
1	153	堅穴3 柱穴076	5-1区 A6-n16	弥生土器	広口壺	15.8	—	残23.3	50%	密: φ1~5mmの石英多量、φ1~3mmの赤色酸化粒少量、φ1~2mmの片岩微量	内: 2.5Y7/1灰白色 外: 2.5YR6/8橙色~2.5Y7/1灰白色 断: 5Y6/1灰色~7.5YR7/4にぶい橙色	内面体部に当て具痕が残り、外面体部は横方向のヘラミガキ、口縁部はヘラミガキ?。	庄内新
3	274	掘立柱穴299	5-2区 A6-t12	土師器	高坏	—	—	残4.5	10%	密: φ2mm以下のチャート・赤色酸化粒多量	内: 10YR4/2灰黄褐色、10YR7/4にぶい黄褐色 外: 10YR8/4淡黄色 断: 10YR5/3にぶい黄褐色	短い脚中部からラッパ状に開く裾部には穿孔2箇所。脚柱部内面にはしづら痕があり、外面はヘラミガキ。	布留古
4	364	掘立柱穴300	5-2区 A6-t12	土師器	壺	—	2.6	残2.9	5%以下	密: φ4mm以下のチャート多量	内: 10YR4/2灰黄褐色、2.5Y8/4淡黄色、2.5Y4/1黄灰色 断: 10YR5/3にぶい黄褐色	内面はナデ調整、底面から体部にかけて放射状に工具痕、外面はタタキ、底面はナデ。	布留古
5	364	掘立柱穴300	5-2区 A6-t12	土師器	壺	(16.0)	—	残8.5	5%以下	密: φ4mm以下のチャート多量	内: 10YR4/2灰黄褐色、外: 2.5Y8/4淡黄色、2.5Y4/1黄灰色 断: 10YR5/3にぶい黄褐色	内面はナデ、外面はタタキ、底面はナデ、口縁部は内外面ともヨコナデ。	5と同一個体
6	296	掘立柱穴379	5-2区 A6-v12	土師器	壺	(13.2)	—	残4.4	5%以下	密: φ2mm以下のチャート・赤色酸化粒・雲母少量	内・断: 10YR6/4にぶい橙色 外: 5YR7/6橙色	口縁端部に平坦面をもち、内側に肥厚する。内外面ともヨコナデ。	布留古
7	34	溝003	5-1区	弥生土器	広口壺	(11.6)	—	残3.2	5%以下	密: φ1mm以下の赤色酸化粒・チャート・雲母少量含む	内・外: 7.5YR7/6橙色 断: 5Y5/1灰色	口縁端面にヘラ状工具による刻み目、口縁部には整形時の指押え痕が残る。	庄内古
8	286	溝003	5-2区	弥生土器	高坏	—	—	残4.4	10%	密: φ1~5mmの石英中量、φ1~4mmの赤色酸化粒微量	内: 2.5Y7/2灰黄色 外: 5YR6/4にぶい橙色~2.5Y7/2灰黄色 断: 7.5YR4/6褐色~10YR4/1褐色	楕円形の坏部で内外面はヘラミガキ?、脚柱部と坏部の接合部・脚柱部内面に工具痕が残る。	庄内古
9	6	溝003	5-1区 A6-n16	土師器	製塩土器	—	2.2	残1.5	5%以下	密: φ2mm以下の石英少量	内・外: 2.5YR6/6橙色 断: N/2黒色	小形の脚台が付き、内外面ともナデ。	布留古
10	58	溝003 上層	5-1区	須恵器	口縁部?	—	—	残3.8	5%以下	緻密	内・断: N8/灰白色 外: N7/灰白色	マキアゲ、ミズヒキ成形、凹線と波状文が巡らされている。	古墳時代中期
11	37	溝004	5-1区	土師器	高坏	—	—	残3.9	10%	密: φ1mmの片岩微量	内・外: 10YR7/3にぶい黄褐色~5YR6/6橙色 断: 5YR6/6橙色	脚部内面にしづら痕があり、外面はヘラミガキ、穿孔は1箇所残存している。	布留古
12	366	溝004	5-2区 A6-q13	土師器	把手	幅5.4	長さ5.0	—	把手90%	密: φ1~3mmの赤色酸化粒少量、φ1~2mmの石英中量	外: 5YR5/8明赤褐色 断: にぶい黄褐色	体部との接合部から剥離しており、外面は指押え後、ナデ。	布留古
13	142	連続土坑群 土坑166	5-1区 A6-o16	弥生土器	高坏	(20.6)	—	残6.9	25%	密: φ5mm以下のチャート多量	内・断: 10YR6/1褐色 外: 5YR7/6橙色、10YR6/1褐色	坏部中位に稜をもつ。	弥生V様式後半
14	347	連続土坑群 土坑388	5-2区 A6-q12	弥生土器	土錐	長さ 残4.4	径1.8×1.8	—	40%	密: 1~2mmの片岩微量	外: 2.5Y7/3浅黄色 断: 2.5Y5/1黄灰色	棒状の粘土の両端に穿孔する、瀬戸内型土錐で1箇所残存している。	庄内古
16	40	土坑039	5-1区 A6-y16	土師器	高坏	(12.2)	—	残4.1	30%	密: φ5mm以下のチャート少量	内: 7.5Y7/4にぶい橙色 外: 2.5Y6/8橙色 断: 7.5YR5/2灰褐色	楕円形杯部で、器壁は薄く、内外面ともヘラミガキ。	布留古
17	148	土坑052	5-1区 A6-v15	土師器	壺	(10.0)	—	残6.0	20%	密: φ1mmの石英中量、φ5mmの白石微量	内外: 5YR6/6橙色~10YR7/5にぶい黄褐色 断: N5/灰色	口縁部は内外面ともヨコナデ、体部は内外面ともヘラミガキ。	布留古
18	148	土坑052	5-1区 A6-v15	弥生土器	鉢	(6.8)	3.8	6.85	40%	密: φ4mm以下の石英多量	内: 2.5Y5/2暗灰黄色 外: 10YR7/4にぶい黄褐色 断: 2.5YR4/2灰赤色~5YR8/4淡赤色	体部は内湾気味に立ち上がり、平底の底部をもつ。内面はナデ?、外面はナデ。	弥生V様式後半
19	67	土坑138	5-1区 A6-q15-16	弥生土器	壺	—	3.8	残6.8	20%	密: φ5mm以下のチャート多量	内: 10YR7/4にぶい黄褐色、5Y8/1灰白色 外: 10YR8/3浅黄褐色~10YR2/1黒色 断: 10YR7/4にぶい黄褐色	円盤状に退化した底部をもち、体部は球形で内面はナデ、外面はタタキ。	庄内新
20	68	土坑140	5-1区 A6-q15-16	弥生土器	壺	(12.6)	—	残4.6	5%	密: φ5mm以下の石英中量、φ2mm以下の赤色酸化粒・雲母微量	内: 7.5YR6/4にぶい橙色 外: 7.5YR4/1褐色 断: 5YR7/6橙色	「く」の字形に短く広がる口縁部をもち、内外面ともヨコナデ調整。体部内面はナデ、ヘラ状の工具痕が残り、外面はナデ。	庄内新
21	139	土坑140	5-1区 A6-q15	弥生土器	高坏	—	10.1	残5.3	80%	密: φ10mm以下の石英多量、φ1mmの赤色酸化粒微量	内・外: 7.5YR7/4にぶい橙色~10YR7/1灰白色 断: 2.5Y5/1黄灰色~2.5Y8/1灰白色	脚部内面はナデ、外面はヘラミガキ、裾端部はヨコナデで穿孔は4箇所である。	庄内新
22	209	土坑207	5-2区 A6-u-v13	弥生土器	壺	(23.0)	—	残8.8	20%	密: φ1~3mmの赤色酸化粒中量、φ1~4mmの石英少量	内: 2.5Y8/2灰白色 外・断: 5YR6/6橙色	体部内面はヘラケズリ後ヘラ状工具によるナデ、指押え痕が残り、外面はタタキ。口縁部は指押え後ヨコナデ、端部には刻み目を施す。	庄内古
23	268	土坑207	5-2区 A6-u-v13	弥生土器	広口壺	—	—	残6.7	5%	密: φ1~2mmの赤色酸化粒中量	内・外: 5YR6/6橙色 断: 10YR5/1褐色	頭部内面は横方向のヘラミガキナデ、外面は縱方向のヘラミガキ。体部内面は指押え後ナデ。	庄内新
24	268	土坑207	5-2区 A6-u-v13	土師器	広口壺	16.0	—	残11.8	30%	密: φ1~8mmの石英中量、φ3mmの片岩微量	内・外: 5YR6/8橙色 断: N4/灰色	体部内面は指押え後工具によるナデ?。口縁部内面はナデ、外面はヨコナデ?。	布留古
25	209	土坑207	5-2区 A6-m-v13	土師器	高坏	(12.4)	—	残7.2	80%	密: φ3mm以下の石英少量	内・断: 5YR6/4にぶい橙色 外: 7.5YR7/6橙色	杯部は内外面ともヨコナデ。脚柱部内面はヘラケズリ後ナデ、外面はナデ。	布留古
26	313	土坑207 上層	5-2区 A6-v-w13	弥生土器	高坏	—	—	残6.0	20%	密: φ1mm以下の赤色酸化粒少量	内・外: 5YR6/6橙色 断: 2.5Y5/6明赤褐色	脚柱部内面はナデ、粘土巻き上げ痕が認められる。外面はヘラミガキで穿孔は2箇所である。	庄内古
27	313	土坑207 上層	5-2区 A6-v-w13	土師器	高坏	—	—	残6.1	20%	密: φ1mmの石英少量	内・外: 7.5YR6/6橙色 断: 10YR5/4にぶい黄褐色	脚柱部内面は横方向のヘラケズリ、外面はナデ。器壁は薄い。	布留古

掲載番号	登録番号	遺構層位	地区	種類	器種	法量(cm)			残存率	胎土	色調	技法・形態の特徴など	時期
						口径	底部径	器高					
28	313	土坑207上層	5-2区A6-v-w13	土師器	高坏	—	—	残7.9	10%	密:1~3mmの石英少量	内・外:2.5YR6/6~7.5YR6/6橙色 断:N5/灰色	脚柱部内面はナデ、絞り痕が認められる。外面はヘラミガキで穿孔は3箇所である。	布留古
29	313	土坑207上層	5-2区A6-v-w13	土師器	高坏	—	(16.5)	残2.1	5%以下	密:φ4mm以下の石英中量	内:10YR3/3暗褐色 外・断:10YR3/2黒褐色	高坏の裾部で内外面ともヨコナデ、端部に面をもつ。	布留古
30	349	土坑305	5-2区A6-g12	弥生土器	甕	—	4.5	残3.7	5%以下	密:φ1~5mmの石英中量	内:7.5YR7/6橙色 外・断:10YR8/2灰白色 断:10YR8/1灰白色~N5/灰色	低く突出する底部をもち、内面は工具によるナデ、外面はタタキ	弥生V様式後半
31	349	土坑305	5-2区A6-g12	弥生土器	広口壺	(15.8)	—	残5.0	5%以下	密:φ1~5mmの石英少量	内・外:7.5YR6/4にぶい橙色~5YR6/6橙色 断:5YR6/8橙色	短く垂下する口縁端面を形成し竹管文を施し、口縁内面端部に波状文を施す。	弥生V様式後半
32	307	土坑375	5-2区A6-w12	弥生土器	二重口縁壺	(26.8)	—	残6.3	5%以下	密:φ1~3mmの石英少量	内:5YR5/4にぶい赤褐色 外:5YR6/6橙色 断:10YR4/1褐灰色	外反した口縁部に粘土帯を付加し、二重口縁を形成する。	庄内新
33	307	土坑375	5-2区A6-w12	弥生土器	高坏	14.2	—	残5.2	50%	密:φ1~3mmの石英少量、φ1~2mmの片岩微量	内・外:2.5Y7/2灰黄色 断:7.5YR6/6橙色	坏部底面はナデ、口縁部は内外面ともヨコナデ。	庄内新
34	299	土坑382	5-2区A6-g11	弥生土器	甕	15.0	—	残14.4	60%	密:φ2mm以下のチャート多量	内:5YR7/4にぶい橙色 外:5YR6/6橙色~10YR7/3にぶい黄橙色 断:2.5Y8/1灰白色	体部内面はヘラケズリ後へラ状工具によりナデ、当て具痕が残り、外面はタタキ。口縁部内面はヨコナデ、外面はナデ。	庄内古
35	327	土坑382	5-2区A6-g11	弥生土器	甕	(17.8)	—	残16.0	20%	密:φ1~7mmの石英少量	内・外:5YR7/4にぶい橙色 断:2.5Y6/1黄灰色	体部内面はヘラケズリ後へラ状工具によりナデ、当て具痕が残り、体部はタタキ。口縁部内面は指押え後ナデ、外面はナデ。	庄内古
36	331	土坑382	5-2区A6-g11	弥生土器	甕	(17.4)	—	残5.4	5%	密:φ3mm以下の石英少量	内・外・断:7.5YR8/4浅黄橙色	体部内面はナデ、外面はタタキ。口縁部は内外面とも指押え後ナデ、端部は内側から外側にナデ調整。	庄内古
37	331	土坑382	5-2区A6-g11	弥生土器	甕	(25.2)	—	残11.8	10%	密:φ1~3mmの石英微量	内:2.5Y5/8明赤褐色 外:5YR6/6橙色~2.5Y5/8明赤褐色 断:2.5Y6/1黄灰色	「く」の字形に外反する口縁部をもち、体部外面はタタキ。	庄内古
38	351	土坑386	5-2区A6-s12	弥生土器	甕	(14.0)	—	残11.7	10%	密:φ5mm以下の石英・チャート、φ2mm以下の赤色酸化粒多量	内:7.5YR8/3浅黄橙色 外:7.5YR8/6浅黄橙色~5YR7/8橙色 断:10YR5/2灰褐色	「く」の字形に緩く外反する口縁部をもち、内外面ともナデ?。	庄内新
39	146	ビット112	5-1区A6-r16	弥生土器	高坏又は器台	—	10.0	残7.3	50%	密:φ1~8mmの石英中量	内・外:5Y7/1~2.5Y8/2灰白色 断:5Y7/1灰白色	脚部内面はナデ、ヘラ状の工具痕が残り、外面はヘラミガキ?。穿孔は3箇所である。	庄内新
40	94	ビット112	5-1区A6-r16	弥生土器	製塙土器	—	3.4	残5.3	30%	密:φ3mm以下のチャート多量	内・断:N4/灰色 外:N4/灰色、2.5Y7/4淡赤褐色	内面底部に棒状の工具痕が認められる。外面底部はナデ、外面下部は2次焼成を受けた。	庄内新
41	96	ビット114	5-1区A6-s15	弥生土器	壺	—	—	残1.5	5%以下	密:φ1mm以下の赤色酸化粒微量	内・外:7.5YR7/6橙色 断:2.5Y6/6~7.5YR7/6橙色	粘土帶を垂下させ二重口縁を形成し、上下の互い違いに円形貼付け浮文を付加する。	庄内古
42	251	ビット217	5-2区B6-c14	弥生土器	甕	(23.4)	—	残4.7	5%以下	密:φ5mm以下の赤色酸化粒少量	内:2.5Y4/3オリーブ褐色、5TR7/6橙色 外:10YR4/1褐灰色、5IR7/6橙色 断:10YR4/1褐灰色	口縁部は外方に大きく開く。外面はタタキ。	庄内古
43	215	ビット217	5-2区B6-c14	弥生土器	底部	—	4.3	残1.9	5%以下	密:φ6mm以下の片岩・チャート中量	内:7.5YR8/6浅黄橙色 外:10YR4/2灰黃褐色 断:7.5YR5/4にぶい褐色	上げ底状の底部で、内面はヘラ状工具によるナデ、外面はヘラケズリ。	庄内古
44	215	ビット217	5-2区B6-c14	弥生土器	土錐	長さ 残7.0	径1.5×1.6	—	90%	密:φ1~2mmの赤色酸化粒微量	外:2.5Y7/1灰白色 断:5Y3/1オリーブ黒色~7.5YR6/6橙色	棒状の粘土の両端に穿孔する、瀬戸内型土錐である。	庄内古
45	269	ビット371	5-2区A6-t13	土師器	二重口縁壺	(19.0)	—	残4.4	5%以下	密:φ1~7mmの石英多量	内・断:7.5YR8/4浅黄橙色 外:5YR7/6橙色	粘土帶を付加し垂下させ、口縁部下端に波状文を施す	布留古
46	316	ビット376	5-2区A6-v14	弥生土器	高坏	—	9.6	残5.5	50%	密:φ1mmの赤色酸化粒少量、φ1~2mmの石英微量	内:5YR6/6橙色 外:2.5Y5/8明赤褐色 断:10YR3/1黒褐色	内面はヘラケズリ、外面は丁寧な縦方向のヘラミガキ、穿孔は3箇所である。	弥生V様式後半
47	309	ビット385	5-2区A6-w12	土師器	壺	8.9	7.3	—	70%	密:φ5mm以下のチャート多量	内・外:10YR8/4浅黄橙色 断:5YR7/8橙色	内面体部指押え、口縁部ナデ、外面体部大小のハケメ、口縁部ヨコナデ	布留古
48	258	落ち込み205上層	5-2区A6-o10	土師器	甕	(35.0)	—	残5.0	5%以下	密:φ3mm以下の石英・チャート多量	内・断:10YR7/4にぶい黄橙色 外:10YR5/3にぶい黄褐色	短い口縁端部に平坦面をもち、内側に肥厚する。口縁部はヨコナデ、体部には指押え痕が残り、口縁部と体部境に強いヨコナデを施す。	古墳中期
49	375	落ち込み205	5-2区A6-r10-11	須恵器	底部	—	(13.8)	残9.5	5%以下	織密	内:N8/灰白色 外:N8/灰白色~2.5Y8/1灰白色 断:N7/灰白色、2.5Y8/1灰白色	甕又は壺の底部である。マキアゲ、ミズヒキ成形で底部はヘラ状工具によるナデ	中世
50	262	落ち込み205上層	5-2区A6-q11	青磁	椀	—	—	残3.5	5%	密	露胎・断:7.5Y7/1灰白色 瓢:7.5Y5/2灰オリーブ色	龍泉窯系青磁で、体部外面に蓮弁文を形成する。	13世紀

石器・金属器観察表

掲載番号	登録番号	遺構層位	地区	種類	器種	法量(cm)			残存率	重さ(g)	色調	特徴など	遺構の時期
						長軸	短軸	厚さ					
2	33	堅穴2・3 棲出面	5-1区	泥岩	砥石	残7.0	2.1~2.95	2.1~ 2.5	80%	68.28	5Y7/1灰色	両端は欠損し、使用面は四面で縦方向の擦痕がみられる。二面は擦り減り、一面には横方向の凹みが認められる。	庄内新
15	347	連續土坑群 土坑388	5-2区A6-q12	青銅製品	鎌	残 18.2mm	残7.9mm	3.0mm	—	0.74		有茎の鋼鎌である。遺存状態は悪く柳葉形の鎌身には中心からやや外れて稜が認められる。	古墳時代 前期以降



調査地遠景（北北東から）



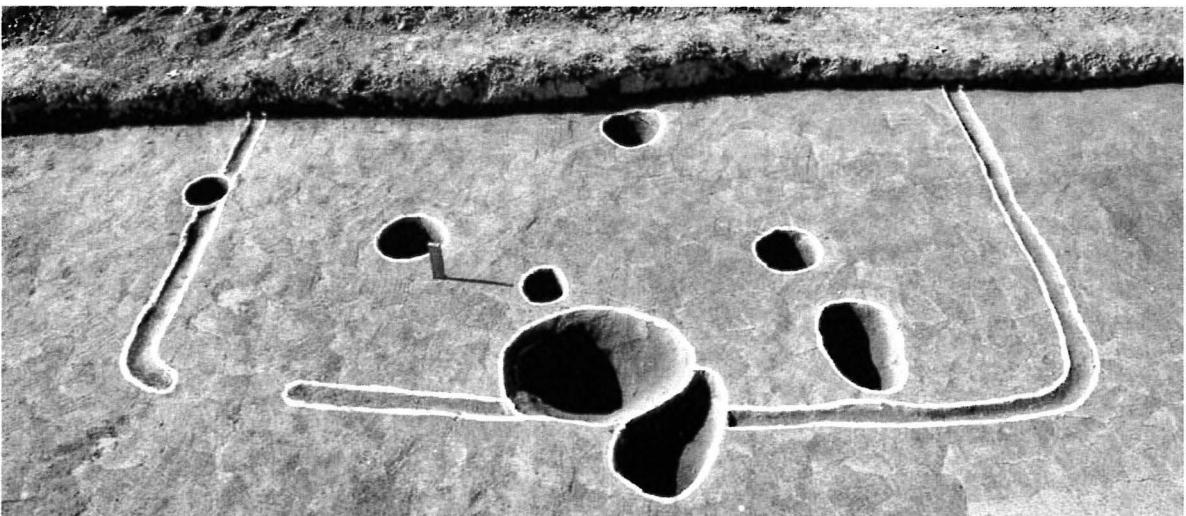
調査地遠景（東から）



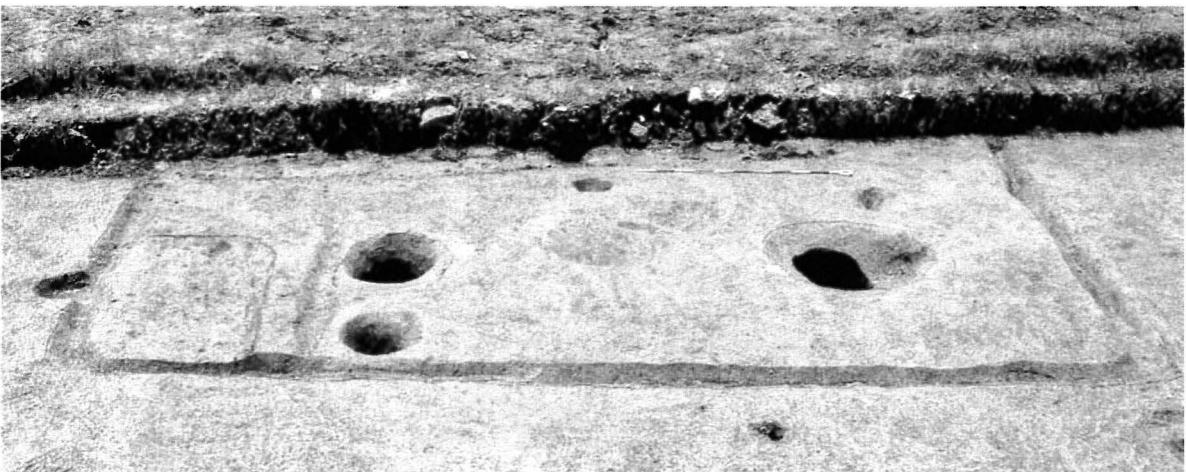
調査地全景（南から）
井辺遺跡全貌



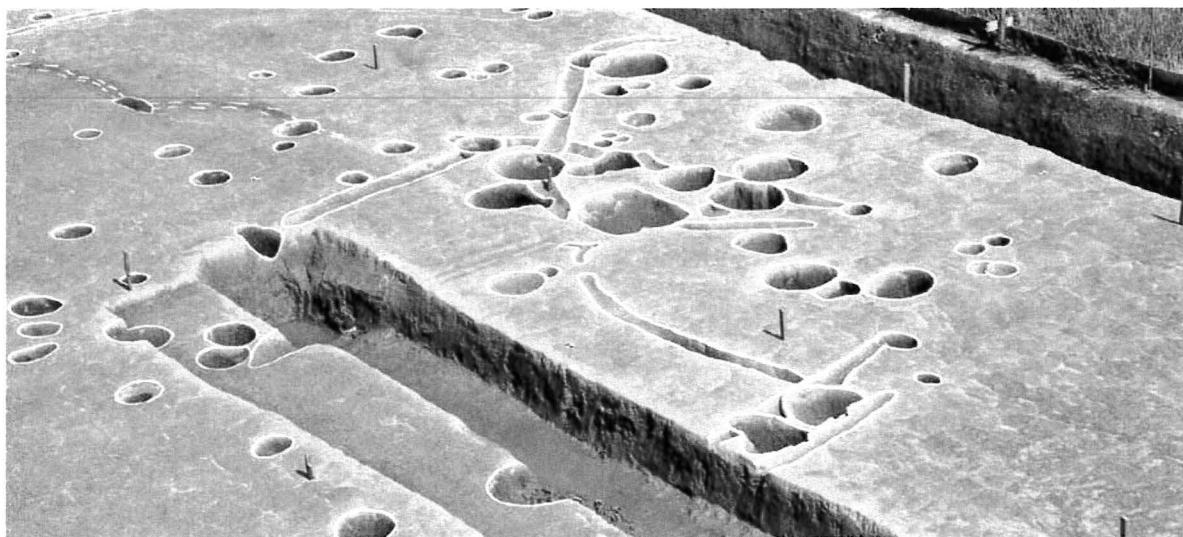
5-1区 中央 壺穴建物(北西から)



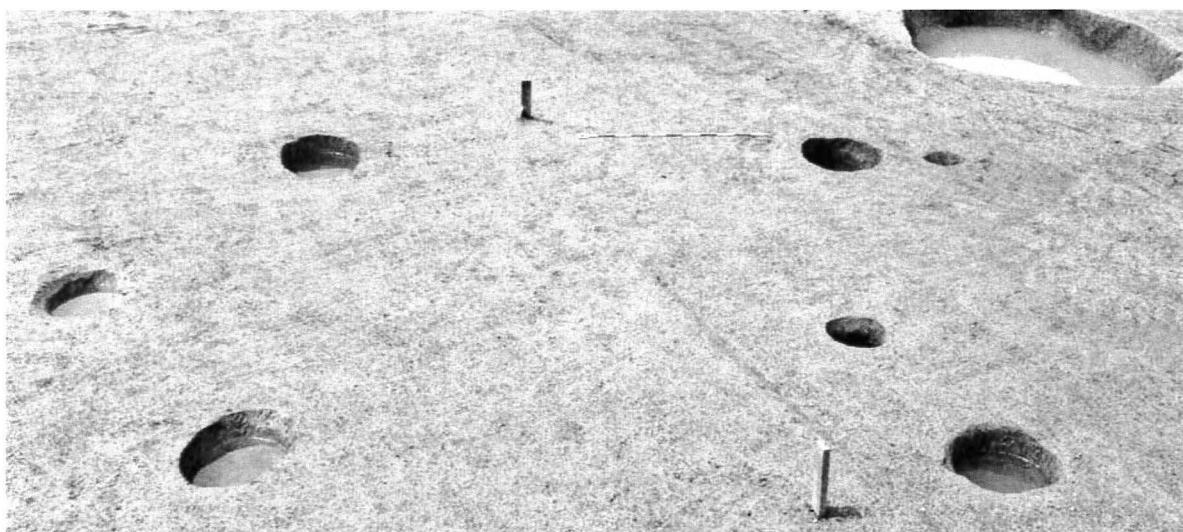
5-1区 壺穴建物1(北西から)



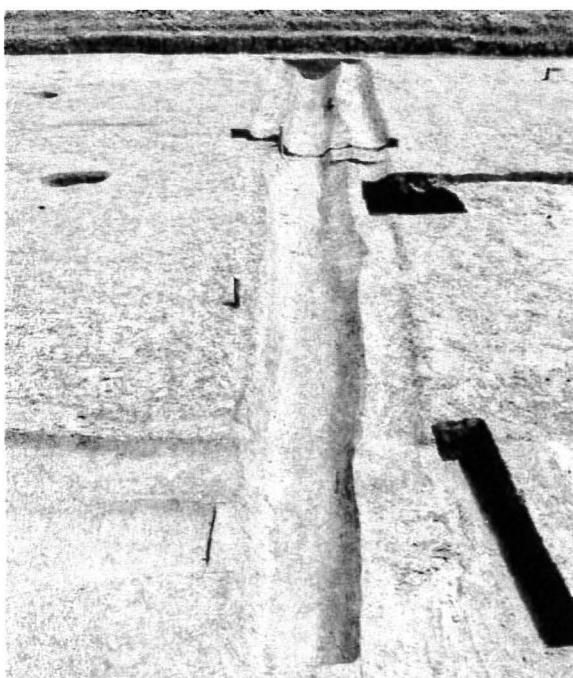
5-2区 壺穴建物
5区 壺穴建物



5-1区 横穴建物2・3(北西から)



5-2区 掘立柱建物(北北東から)

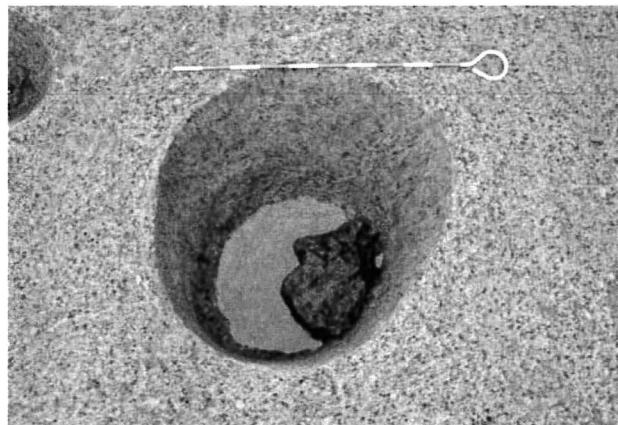


5-2区 溝003(北から)



5-1区 溝004・136(南から)

5区 建物遺構・溝



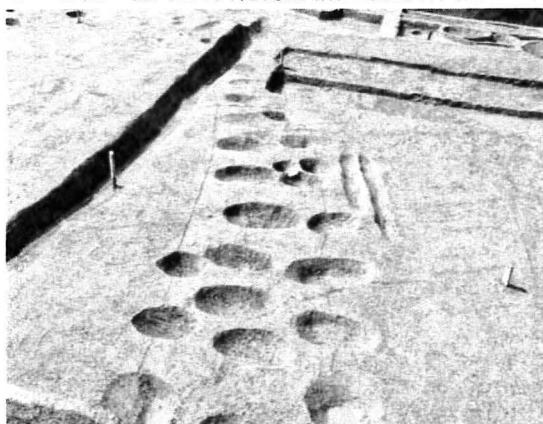
5-2区 柱穴379炭化礎盤(掘立柱建物)(南から)



5-2区 柱穴379炭化礎盤(掘立柱建物)(南から)



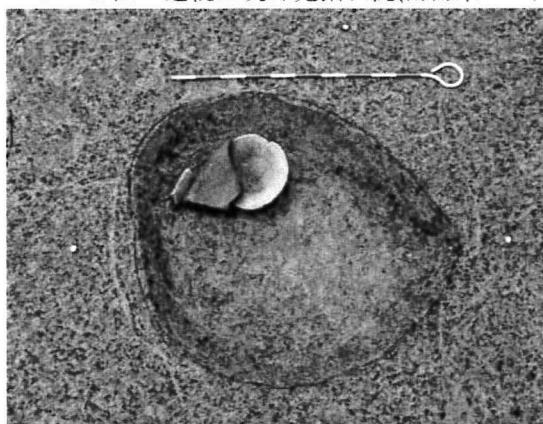
5-2区 連続土坑群堆積状況(南西から)



5-2区 連続土坑群完掘状況(南南東から)



5-1区 土坑052遺物出土状況(西から)



5-2区 土坑375遺物出土状況(北から)



5-2区 土坑382遺物出土状況(南から)



5-2区 土坑207堆積状況(南から)

5区 柱穴・土坑



5-2区 土坑385遺物出土状況(北から)



5-2区 落ち込み205 (西から)



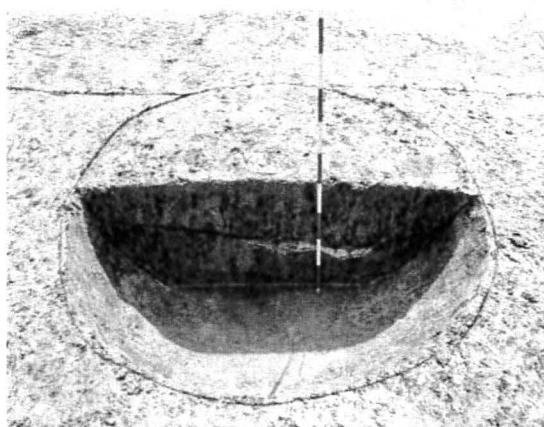
6-1区 全景(南東から)



6-2区 全景(北から)



7区 全景(西から)



7区 土坑026 (西から)



5-1区 西部 噴砂検出状況(北東から)



5-2区 溝136と噴砂の切り合い(南から)

5区 土坑・落ち込み、6区、7区、噴砂痕



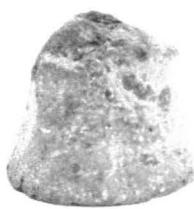
1 橫穴建物 3 柱穴076



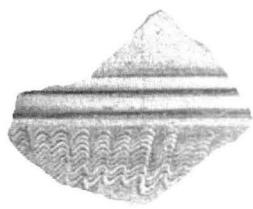
1 橫穴建物 2・3 檢出面



2 挖立柱建物 柱穴299 3



9 溝003



10 溝003



12 溝004



13 連続土坑群 土坑166



15 連続土坑群 土坑388



16 土坑036



17 土坑052



18 土坑138



19 土坑138



21 土坑207

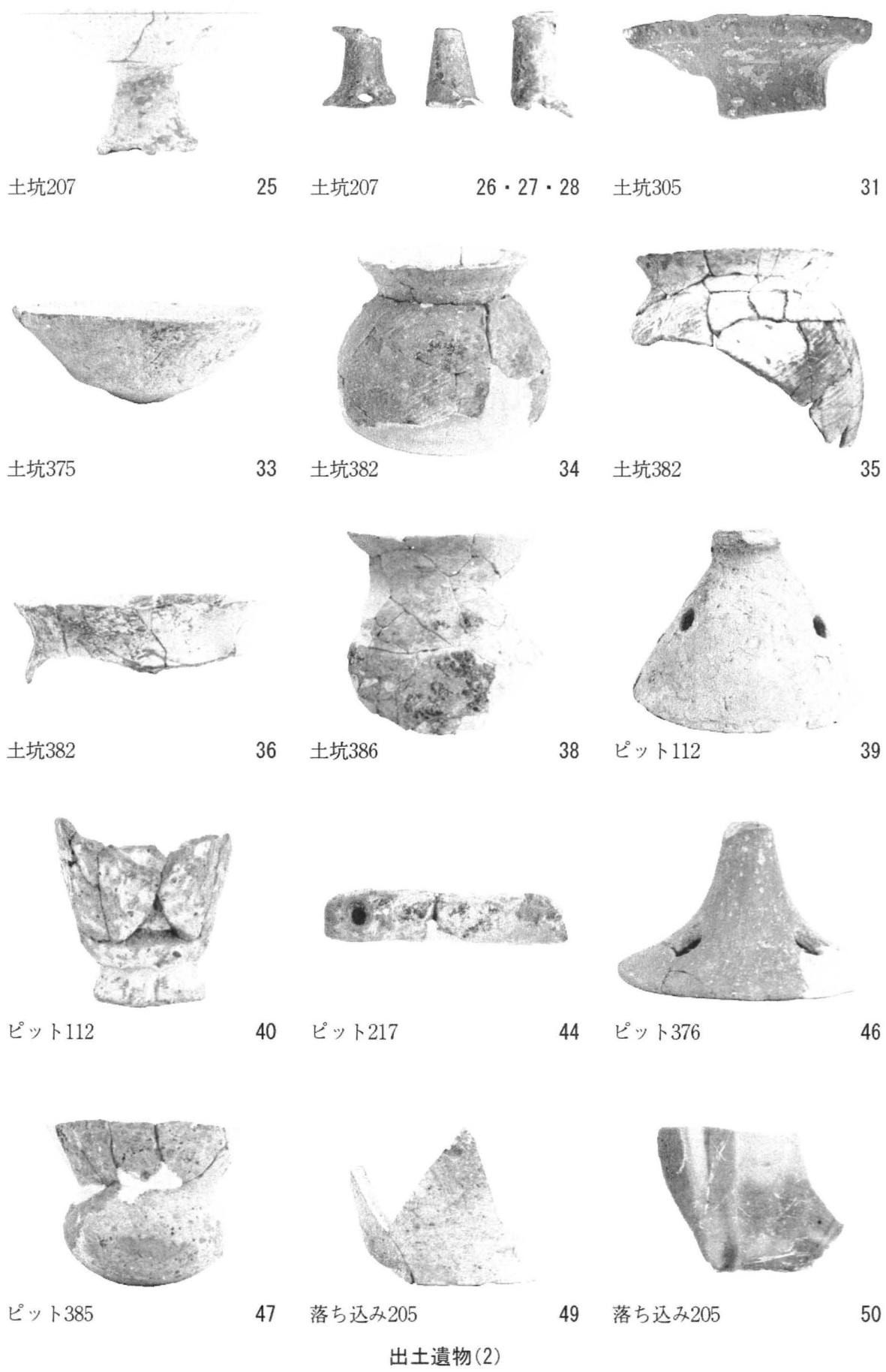


22 土坑207



24 土坑140

出土遺物(1)



報告書抄録

ふりがな	いんべいせき							
書名	井辺遺跡							
副書名	都市計画道路湊神前線道路改良工事に伴う発掘調査報告書							
編著者名	森原 聖							
編集機関	公益財団法人和歌山県文化財センター							
所在地	〒640-8404 和歌山県和歌山市湊571番1 TEL073-433-3843							
発行年月日	西暦2013年3月25日							
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	○'〃				
いんべいせき 井辺遺跡	わかやまし 和歌山市 いんべ 井辺	30201	308	34° 12' 59"	135° 12' 24"	2011年2月22日 ～8月31日	1,812m ²	都市計画 道路湊神 前線道路 改良工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
井辺遺跡	集落	弥生時代 古墳時代	竪穴遺構・掘立柱 建物・溝・柱列	弥生土器・土師器・須恵器・金属製品	特になし			
要約	井辺遺跡の発掘調査を行った。弥生時代終末期から古墳時代前期を主とする、竪穴建物、掘立柱建物、溝、柱列等を検出した。建物遺構は、調査区中央の微高地に集中しており、微低地にあたる調査区の東端と西側は遺構の密度は低い。既往の調査によって明らかとなってきた、当遺跡の集落構造を復元するための、重要な成果となった。							

井辺遺跡
 -都市計画道路湊神前線道路改良工事に伴う発掘調査報告書-

2013年3月

編集・発行（公財）和歌山県文化財センター
 印刷・製本 白光印刷株式会社